

ONE ANSWER

ようこそ、長崎のミュージアムへ

博物館・美術館ガイドブック

THE
MUSEUM
GUIDEBOOK
OF
NAGASAKI





ONE ANSWER

ようこそ、長崎のミュージアムへ

このまちを形成しているのは、
層のように重なり合う多様な文化。
それは複雑かつ難解でありながらも、
まだ見ぬ世界に受け継がれていく宝なのだろう。

ONE ANSWER

平戸、長崎、島原半島、外海、そして五島列島へ、
海外交流と信仰の歴史を紐解く旅に出る。
無数にある宝と宝をつないで、
ひとつつの答えにたどり着く。

海外交流

古代から、海の道を通じて行われてきた海外貿易。

各地の入り江には港が開かれるようになり、まちは活気つく。

やがて訪れた鎖国期にも、

長崎は国際貿易都市として繁栄を極めた。



信仰の足跡

海の道がもたらしたもの、その中には宗教が含まれる。

フランシスコ・ザビエルの布教を機に始まったキリスト教時代。受洗した人々は、禁教の世が訪れる 것을 知る由もなかつた。



Contents

海の道がもたらした繁栄と信仰

平戸・生月

キリスト教史に名を残したキーパーソンたち

12

異文化と出会ったまち

長崎市

長崎歴史文化博物館
大浦天主堂	キリスト教博物館
長崎県美術館

キリスト教史から届くメッセージ 島原半島

有馬キリスト教遺産記念館
--------------	-------

キリスト教時代の原風景が残る 長崎市外海地区

長崎市外海歴史民俗資料館
--------------	-------

心安らぐ祈りの島

五島観光歴史資料館
-----------	-------

五島列島

平戸のアゴ漁(平戸市)
サント・ドミニゴ教会跡資料館(長崎市)
長崎くんち(長崎市)
卓袱料理と長崎検番(長崎市)
フエステイビタス ナタリス(南島原市)
具雜煮(島原市)
カンコロ(長崎市外海地区)
堂崎天主堂(五島市)
五島のきびなご(五島列島)

受け継がれる心

嘗みに出会う旅

かくれキリストの里 春日集落へ(平戸市)
長崎歴史文化博物館 学芸員 深瀬さんと行く「二つの居留地」(出島 唐人屋敷跡・旧外国人居留地)(長崎市)
潮風を感じながら絶景に出会う ドロ神父の愛が語り継がれる(南島原市)
出津集落をめぐる(長崎市外海地区)
久賀島を訪ねて(五島市)

年表 海外交流の歴史とキリスト教史 エリアマップ
--------------------------	-------

キリスト教史に名を残した

絵、石橋澄

有馬晴信

一五六七—一六二二

日本のキリスト教は
この人から
始まった

島原半島を支配する肥前有馬家の
当主。一五八〇年に洗礼を受けキリ
シタン大名に。秀吉の禁教令によつて
迫害の風が吹き荒れたころ、自領に多
くの宣教師やキリスト教の教育施設
を受け入れ、日野江城を拠点とする
彼の領地は、ながらキリスト王國の
ようであった。一五八二年に大村純忠、
大友宗麟とともに天正遣欧使節を
ヨーロッパへ派遣。晩年も甲斐へ追放さ
れ刑され、日本におけるキリスト教
の大八事件では、江戸幕府の厳しい禁教
政策につながった。

開港都市・長崎の礎を築いた

大村純忠

一五三三—一五八七

有馬晴純の次男として誕生するが、母方の
伯父・大村純前の養子になり十七歳で大村家
第十八代当主を継承。しかしその立場は盤石
ではなかった。周辺を敵国に囲まれた領地を富
ませるためボルトガル貿易とキリスト教を自領
の横瀬浦や長崎に呼び入れ、自身も受洗し、
本初のキリスト大名に。一五八〇年に長崎、
茂木をイエス会に寄進。その二年後には「天
正遣欧使節」を長崎からヨーロッパに派遣した。

フランシスコ・ザビエル

一五〇六—一五五一

イエス会の創設者の一人。東洋で
布教するべく、インドそれに次いで
一五四九年に日本の鹿児島に到着。
初めて日本にキリスト教の種をまいた。
わずか二年ほど滞在であったが
彼が布教に訪れた鹿児島・平戸・山
口・堺・豊後を中心に信仰が芽吹き
広がった。ザビエルが去った後もトーレ
スらが布教の努力を続け、やがて大
村純忠との縁が長崎のキリスト教史
につながっていく。

最初に吹き荒れた禁教の嵐



豊臣秀吉

一五三七—一五九八

織田信長の死後、権勢を継ぎ天下統一を果たす。最初
は信長に住む外国人のため
禁教令下にある一八六三年に長崎
へ赴任。居留地に住む外国人のため
の教会の建立を任せられ、翌年完成
させた。「天主堂」と日本語で掲げ
たその心には、二百五十年の迫害を
越えて日本にキリストianの子孫が
残っているのではなく、願いが込めら
れていた。浦上信徒との出会いは
「信徒発見」として宗教史上の奇跡
とされた。その後も日本人司祭の
育成、教理書などの翻訳に尽力。生
前の遺志により大浦天主堂の地下
に埋葬された。



秀吉の禁教令をおそれず自領に受け入れた



ブティイジヤン神父

一八二九—一八八四

パリ外国宣教会の宣教師。まだ
禁教令下にある一八六三年に長崎
へ赴任。居留地に住む外国人のため
の教会の建立を任せられ、翌年完成
させた。「天主堂」と日本語で掲げ
たその心には、二百五十年の迫害を
越えて日本にキリストianの子孫が
残っているのではなく、願いが込めら
れていた。浦上信徒との出会いは
「信徒発見」として宗教史上の奇跡
とされた。その後も日本人司祭の
育成、教理書などの翻訳に尽力。生
前の遺志により大浦天主堂の地下
に埋葬された。

外海の人々を救つた人類愛



禁教と海外貿易をつかさどるエリート官僚

天草四郎
一揆軍を率いる

一六二三頃—一六三八
キリスト大名小西行長の家臣益田甚兵衛の息子。差し伸べた手に留まつた鷲がキリストianの經典が入つた卵を産んだ「学ばずして読み書きができる」二海の上を歩いたといつた不思議な伝説があり、神童どうたわれた。終結後討ち取られた四郎の首は長崎に運ばれ島対岸にさらされたという。

長崎奉行

幕府老中の支配下にある遠国奉行の一つであるが、「長崎」というまちの性質上、他にはない特有の任務があった。大きなのは「キリスト取り締まり」と「貿易統制」である。百千七人（諸説あり）の歴代奉行で多くのキリストianの存在は、一揆軍の精神的支柱となつた。終結後討ち取られた四郎の首は長崎に運ばれ島対岸にさらされた。貿易の不正などないか互いを見張る仕組みがとられた。



ド・ロ神父

一八四〇—一九一四

一八六八年にブティイジヤン神父に伴わ
れ長崎へ。浦上四番崩れの大迫害の風
中、石版印刷の技術を使つて「大浦天主堂
版」と呼ばれる教理書を印刷し宣教を続
けた。禁教令が解かれた後は一八七九年
に海外地区の主任司祭へ着任。貧しさに
瀕していた外海の人々に驚き、「魂とともに
肉体も助ける」と私財を投げうつた。
神父が取り組んだのは教会建設をはじめ
授産、福祉、教育、農業振興と多岐にわた
る。来日以来四十六年、故郷フランスの土
を踏むことなく愛する外海の地に眠る。

キーパーソンたち

「信徒発見」の奇跡に立ち会つた神父



外海の人々を救つた人類愛

天草四郎
一揆軍を率いる

一六二三頃—一六三八
キリスト大名小西行長の家臣益田甚兵衛の息子。差し伸べた手に留まつた鷲がキリストianの經典が入つた卵を産んだ「学ばずして読み書きができる」二海の上を歩いたといつた不思議な伝説があり、神童どうたわれた。終結後討ち取られた四郎の首は長崎に運ばれ島対岸にさらされたという。

天草四郎
一揆軍を率いる</p



ONE
ようこそ、長崎のミュージアムへ
ANSWER

博物館・美術館ガイド

県内の博物館・美術館は、長崎を掘り下げる旅にふさわしい場所。多種多様な資料を通して、そのまちの特色がより鮮明に見えるてくるだろう。ここでは九つの博物館・美術館が収蔵する資料の中から、

海外交流と信仰の歴史にまつわるもの厳選。ポルトガル船の来航とキリスト教の伝来、二百五十年以上にわたった禁教期などこのまちが歩んできた歴史、受け継がれる文化とともに紹介する。時空を超えて、宝箱を開けるような旅に出かけよう。

※掲載している収蔵品の中には、常設展示されていない資料が含まれています。展示状況につきましては、各館にお問い合わせください。

世界文化遺産
長崎と天草地方の
潛伏キリシタン関連遺産とは

キリスト教禁教政策の下で、密かに信仰を伝えられた人々の歴史を物語る、他に類を見ない証拠で、二県六市二町にまたがる十二の資産で構成されています。





地球儀（複製）

一七〇〇年（原品）
松浦史料博物館所蔵 平戸オランダ商館展示
オランダ・アムステルダムのアルク工房製作された
地球儀、長崎出島より松浦家三十四代 松浦靜山
が入手したもの。

平戸・生月

繁栄と信仰

海の道がもたらした



History

一五五〇年 平戸にポルトガル船が来航。ザビエル、平戸にて布教

一五九九年

平戸でキリスト教が禁教になる

一六〇九年

平戸にオランダ商館を設置

一六四一年

平戸から長崎出島へオランダ商館が移転

雷にたとえられる、平戸瀬戸の激しい潮を越えて海上を行き交う船たち。

かつて平戸島は、博多と中国の寧波（ニンポー）を結んだ「大洋路」の中継地だった。

京都、堺、博多などから商人が訪れた九州北西部の小さな島は、国内有数の貿易港に発展。

西の都と呼ばれるようになり、やがて中国船が開拓した海路を通じて、ポルトガル船が来航する。本格的なキリスト教時代の幕開けは、様々な疑惑や憶測を生む火種になる一方で、

信仰を守り抜いた信徒たちの礎になった。

海の道がもたらしたのは繁栄だったのか、混乱だったのか。

白波を立てて渦巻く潮流の向こうに、先人たちの歩みの跡が見えてくる。

歴史ある建物と 多様なコレクション

一五五〇年、平戸島へのポルトガル船の来航を機に、イエズス会による本格的なキリスト教の布教活動が始まったのは、松浦家二十五代・隆信（まつうぶ のぶのぶ）一族（だん）に含まれ、のちに大名になった。松浦家が時の戦国大名にまで上り詰めることができたのは、後期倭寇の頭目だった王直と隆信によるものだったといわれている。

城下町の風情が残る平戸市街地をそぞろ歩くと、港からほど近い高台に立派な石垣が見えてくる。松浦史料博物館は、一八九三年に建てられた松浦家の私邸「鶴ヶ峯邸」を活用

した博物館。格式の高い、併まいそものも見どころと言えるだろう。ここでお目にかかるのは、平戸藩主となり、壹岐を含む長崎県北部を治めるようになった松浦家の繁栄を伝えるコレクション。学芸員の出口洋平さんは、その特色を”ラインナップの多様さ”と話す。「松浦家三四四代清（静山）によって収集されたものが大半を占めますが、歴代当主の愛用品など、代々伝わるものに残されています。文化財に登録された貴重な逸品はもちろんのこと、なぜこんなものまで集めたんだ?と不思議に思う、いわゆる珍品の部類に当たるまるのようなものも含まれています」。



松浦史料博物館

平戸市鏡川町12
TEL.0950-22-2236
開館時間／8時半～17時半
休館日／12月29日～1月1日
入館料／一般660円、
小中高生330円



松浦史料 博物館

Matsura
Historical
Museum

松浦史料博物館の敷地内にある、茶室「閑雲亭」。茶道鎮信流でたてたお茶のお供にいただけるのは、復元菓子のカスドースや烏羽玉（有料）。



たとえば、甲冑や太刀の揃えなどに見られる優れたデザインは、現代の視点で捉えても、奇抜かつ斬新、そしてどこか洗練されている。戦乱の世が終わった殿様たちが、自らの威儀を保つためにこだわったという。また、舶来品が多く含まれるところからも、海外貿易に基づいた平戸藩の繁栄の歴史がうかがえる。

平戸にあつた オランダ貿易の拠点

江戸時代初期の鎖国以前、平戸からボルトガル船は去つたものの、オランダやイギリスの商館は開設されていた。中でも平戸和蘭商館は、徳川家康からの朱印状を得て一六〇九年に設置。その後、幕府の命により長崎の出島へ移転すると、大洋路の時代から続いた、海外貿易港としての役割は終わりを迎える。

松浦史料博物館から歩くこと約十分。三百七十年余りの時を経て現代によみがえった、平戸オランダ商館にたどり着く。海沿いに佇む白亜の

建物は、一六三九年築造の平戸和蘭商館の倉庫を忠実に復元したものだといふ。ここでは松浦家コレクションの中から、ボルトガル貿易を含む、海外交流の歴史を伝える収蔵品を展示。松浦史料博物館とあわせて訪ねたい。

また、時間が許せば、平戸港を発着する的山大島や度島行きの船に乗つて、船上から建物を眺めてみるのもおすすめだ。かつて海の道を渡り、平戸の地に降り立つ人々。彼らが目にした風景が目の前によみがえる。大航海時代に想いを馳せることができ、貴重な体験になるだろう。



平戸オランダ商館
平戸市大久保町2477
TEL 0950-26-0636
開館時間／8時半～17時半
休館日／毎年6月第3火水木曜
入館料／一般310円、
小中高生210円

平戸オランダ

商館

Hirado
Dutch
Trading
Post



平戸オランダ商館



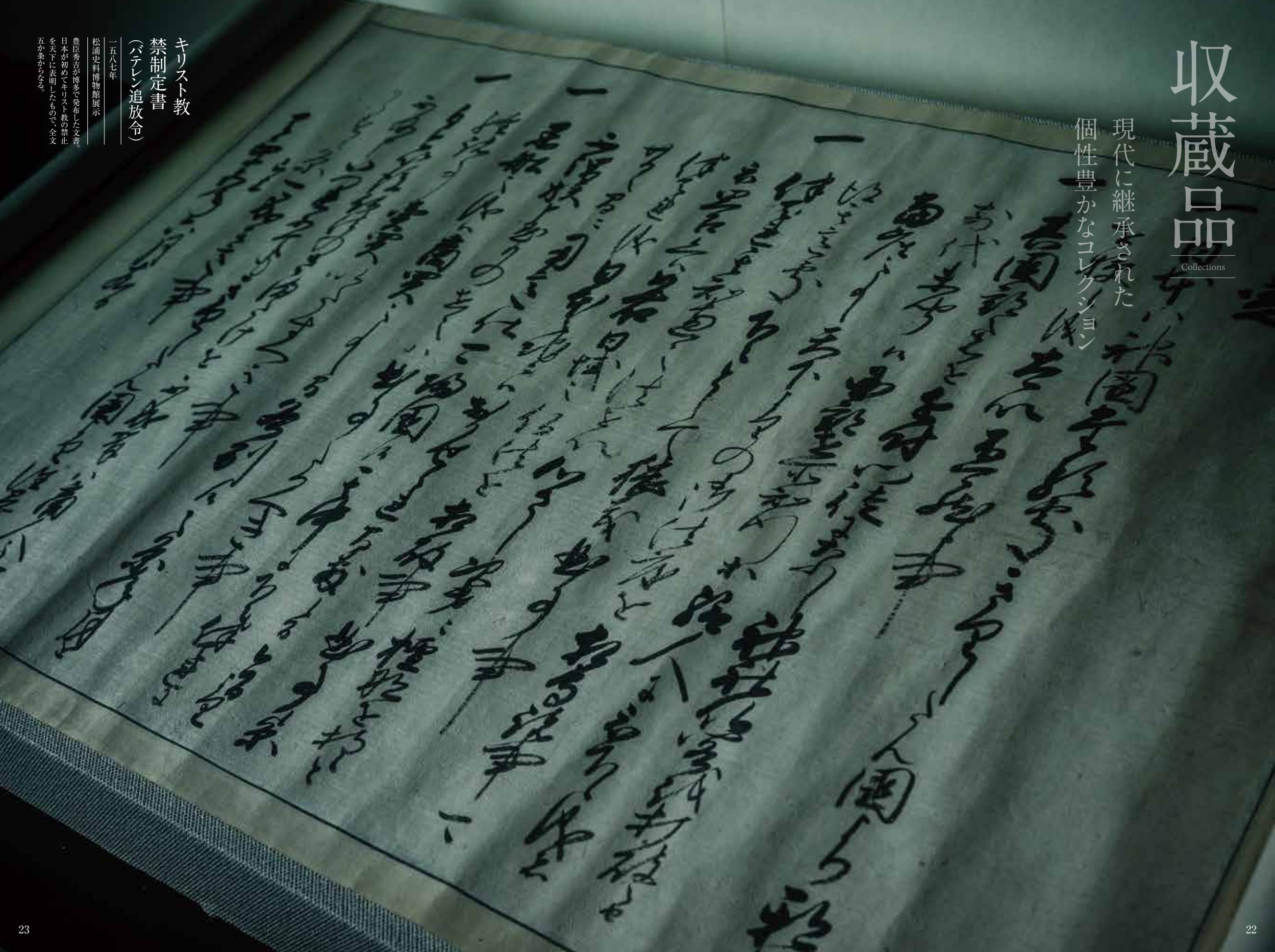
オランダ船首飾木像(複製)

ボルトガル船模型

收藏品

Collections

現代に継承された
個性豊かなコレクション



キリスト教
禁制定書
(バテレン追放令)

松浦史料博物館展示

一五八七年
豊臣秀吉が博多で発布した文書。
日本が初めてキリスト教を禁止
を天下に表明したもので、全文
五か条からなる。

南蛮甲冑

十七世紀

平戸オランダ商館展示
輸入したオランダの甲冑を日本
風に作り替えた、大変珍しいも
の。大顎部を守る草摺など、もと
もとはなかつたバーツが加えられ
ている。



船櫂
(伝八幡船の旗)

十六世紀

平戸オランダ商館展示
八幡船と呼ばれた倭寇の船が使
用した船印。中央に源氏の氏神
八幡神の称号「八幡大菩薩」、
右に平戸春日神社の祭神「春日
大明神」、左に松浦家が守護と
した式内社「志自岐大菩薩」の
神号が墨書きされている。



伊能図・
平戸島図

一八二三年

松浦史料博物館展示

一八一三年に平戸島内で測量が
行われた。その際平戸北部にあ
る白岳山頂において、当時藩主
だつた鹿が立ち合つた。



大曲
三記

江戸時代前期

平戸オランダ商館展示

松浦家の事績を記した旧記。
南蛮の黒船が来航し、全国か
ら商人がやづきた平戸。西の
都と表現されたという内容が
記されている。

受胎告知図柄
菓子鉢

十七世紀

松浦史料博物館展示

禁教期にあたる十七世紀のもの。
松浦家二十一代久信の妻がキリ
シタだつたもあり、松浦家
内のキリスト教信仰に関わるも
のと考えられている。おひなぎの
都市ベニルトで焼成されたもの。
絵柄は、天使ガブリエルがマリ
アに救い主の母となることを告
げている場面。



受胎告知図柄
菓子鉢

十七世紀

松浦史料博物館展示

禁教期にあたる十七世紀のもの。
松浦家二十一代久信の妻がキリ
シタだつたもあり、松浦家
内のキリスト教信仰に関わるも
のと考えられている。おひなぎの
都市ベニルトで焼成されたもの。
絵柄は、天使ガブリエルがマリ
アに救い主の母となることを告
げている場面。

関連資産
平戸の聖地と集落

中江ノ島

生月島の東の沖合に浮かぶこの島は、主に生月島のかくれキリシタンが岩からしみ出す水を採取し聖水とするお水取りの儀式を執り行う大切な場所、船着き場がなく危険なため、上陸は原則禁止である。



平戸市生月町

博物館・島の館

Hirado City
Ikitsuki-cho
Municipal Museum
Shima no
Yakata

禁教期に始まった
かくれキリスト教の
本質にふれる

信仰を守るために
併存を選んだ
信者たち

平戸大橋から車で約三十分。手つかずの自然が残る風光明媚な生月島は、禁教期に密かに守られてきたかくれキリスト教が、受け継がれてきた島である。なぜこの地に、かくれキリスト教は生まれたのだろうか。

平戸松浦氏の重要な家臣だった籠手田氏と一部氏は、キリスト教に入信後、両氏が治めていた生月島、度島、平戸西部で一斉改宗を行った。すべての住民がキリスト教になつたもの、その後状況は一変する。

江戸幕府が禁教令を出す十五年前。一五九九年、籠手田氏と一部氏が領地を捨てて約六百人の家臣・領民と共に長崎に向かったため、平戸はいち早く禁教に入ったのだ。。

「信仰の有無を確認するために、絵踏や宗門改めが行われるようになると、踏絵を踏みながら信仰を続けるかくれキリスト教が一部の地域に現れました。取り締まる役所側としては、踏んでくれればキリスト教でないことを表向きには証明できる。一方、キリスト教側は、信仰を継続するために、仏教や神道を併存させる形を選びました。つまり両者合意の上で、信仰は成り立っていたのです」と、平戸市生月町博物館・島の館館長の中園成生さん。

かくれキリスト教コーナーでは、お掛け絵やコンタツ、お水瓶など信者から寄贈された信仰用具を展示。また、それぞれがどのように使われてきたのか、行事の様子を撮影した写真や映像などから理解できるよう工夫されている。





昭和初期のかくれキリストの住まいを復元。三方の壁を石垣に持たせかけた内側に、アダ・ヨコザ・ザシキ・ナンドの四間とニワ(土間)を配置した間取り。御前様とともに神棚、荒神様、お大師様、仏壇などが祀られている。



12月から4月にかけて行われていた鯨漁。冬の西海の海に、獲物を追いかける勇壮な男たちの様子をジオラマで紹介している。獲れた鯨からは主に油を取り、肉は塩漬けにした。輸送や冷凍技術が発達していなかった頃の漁師たちは、鯨のほかに、アワビ、アゴ、イカなど加工に向いている魚介類をおもなターゲットにしていた。



した。益富組は、鯨製品の流通を管理するなどして安定経営を実現。海外との貿易港が長崎に移され、財政難にあえぐ平戸藩にもかなりの献金を行っている。

島の館では、生月島の基幹産業である水産業にまつわる、ダイナミックかつ夢にあふれた歴史についても紹介している。江戸時代の鯨獲りの様子を表現したジオラマや天空を舞うミンククジラとツチクジラの骨格標本、捕鯨技術や定置網技術の変遷など、実物や模型を含めた立体的な展示は見どころがたっぷり。また、県内唯一の魚と漁業に特化した展示室「フィッシュシャーマンズアリーナ」も、まるで童心にかえったように楽しめる空間だ。

鯨、マグロ、アワビ、アゴ……。生月島沿岸は古くから豊穣の海といわれてきた。江戸時代には、捕鯨やマグロの定置網漁で栄え、日本最大の鯨組・益富組が生月島を本拠地と

西海の海で 繰り広げられた 男たちのロマン

長年、かくれキリスト信仰の調査・研究に取り組んできた中園館長は、次のように語る。「たとえばオラショというお祈りについて、一六〇〇年頃に唱えられていたものと、その後生月島で唱えられたものを比べてみても、ほとんど変化していません。従来、生月島のかくれキリストの信仰形態は、宣教師が不在になつた後に残された信者たちが変容したものだと捉えられきましたが、実はそうではなく、布教が始まった頃のキリスト信仰の様相を、ほぼ忠実に継承していると考えられます」。



フィッシュシャーマンズアリーナ



民俗コーナー「島の暮らし」

收藏品

Collections

不在になつた宣教師、
祈りをつないだ信仰用具

お水瓶

年代不明

「お授け(洗礼)」「戻し(葬儀)」の
ほか、人や家、牧野の祓いの際に瓶
の聖水を振りかける。瓶を覆って
いるのは、初節句のお祝いの際に
作ったのぼりを再利用した布。



お札

年代不明

平戸・生月島におけるかくれキ
リシタン信仰の特徴を表す代表
的な資料。マリア様の生涯の中の
十五の場面を表した「マリア十五
玄義」にもとづいて作られた十
六の木札で構成されており、札の
吉凶で運勢を占めた。



コンタツ

*部分

十六世紀 - 十七世紀

コンタツとはロザリオのこと。本来はラショを唱える際に用いた。
木玉を組み合わせた十字の部分だけが残り、「戻し(葬儀)」で亡くなれた人にかざして天国に導くのに用いられた。



お掛け絵

洗礼者ヨハネ

掛け軸に仕立てた聖画のこと。
いろいろな種類があり、
ヨーロッパを起源とするキリスト教絵画の
モチーフをなぞった絵柄が多い。

島の館では約三十のお掛け絵を所蔵している。

年代不明
米俵が描かれているこの絵は、キリスト教絵
画のモチーフを継承する他のお掛け絵と一緒に
線を画す。生月島のキリストは、中江ノ島
を水や風を治める洗礼者ヨハネサンジウ
この聖地として崇拜し作神として五穀豊
穣を祈願したと考えられる。



聖母子と二聖人

年代不明

幼子を抱く聖母の下に描かれているのは、
イエズス会の創始者であるフランシスコ・ザ
ビエルとファン・オデ・ロヨの二人の神父。
生月島での布教が、イエズス会主導で行わ
れてきたことを示す資料でもある。



オラシヨ本

明治以降

行事の際に唱えられる祈り。
「オラシヨ」を記録した資料。
生月島では声に出てオラ
シヨを唱えるため紙に記録
するようにならのは禁教が
解かれ書き記しても問題が
なくなった明治以降と考えら
れている。



お道具
(オテンペンシヤ)

年代不明

キリストン信仰では体を鞭打つ
苦行のほか病気治しにも使わ
れ、かくれキリストン信仰でも
病気を祓つたり、家や牧野を祓
い清めたりするのに用いる。



オマブリ

現代

和紙を切って作る十字形の呪具。
お守りとして人々に呑ませた
り、家の柱に貼ったり着物の襟
や財布に入れたりして用いる。

受け継がれる心 ①

北風が吹いたら 季節到来 平戸のアゴ漁

九月から十月頃に最盛期を迎えるアゴ（トビウオ）漁。平戸では、この時に吹く風を「アゴ風」と呼び、九州から山陰にかけての海底で産まれた、ホソアオトビやツクシトビウオなどの稚魚が北風とともに南下してくる。以前に比べれば、漁をする船は少なくなったというが、二艘曳きの船が群れを追いかける光景は、昔も今も変わらない季節の風物詩である。

串に刺したアゴを、炭火でまんべんなくこんがり焼いてしつかり乾燥させると、旨味が深い上品なしが取れる。黄金色に透き通ったアゴだしは、お正月の雑煮や茶わん蒸し、うどん、煮物など様々な料理と相性がいい。

撮影協力：林水産（平戸市）





春日集落へ

かくれキリストの里

約四百六十年前、生月島と同様に春日集落の住民もキリスト教に一斉改宗し、日本における初期のキリスト教布教の地となった。後にキリスト教は禁止されるが、人々は仏教や神道を受け入れながら、密かにキリストの信仰を継承。そして禁教が解かれた後もなお春日の人々は「かくれキリスト」としてそれまでの信仰を継承し続けた。

集落にある案内所「かたりな」を訪ねた。築七十五年の古民家で出迎えてくれたのは、増田貞子さん。かたりなでは地元の人たちが地域のことや暮らしのことを話す“おもてなし”をしてくれる。

命の源
安満岳に抱かれて

貞子さんは優しい口調で「安満岳様」の話を始めた。安満岳は平戸島の最高峰であり、春日集落はこの山からのびる三筋の尾根に挟まれている。「子どもの頃から毎朝、満岳様の方を向いて『今日も無事に過ごすことができますよう』と併んでいました。私は十九歳で同じ集落の人と結婚しましたが、嫁ぎ先の庭からは生家からは見えなかった安満岳様が富士山のようにきれいに見えます」。

安満岳は昔から神道や仏教における信仰の場とされていながら、かくれキリスト信者が唱える「オラショ」の中にも「安満岳の奥の院様」という文句があるという。異なる宗教が共生し、信仰が重なり合う安満岳。貞子さんは言う。「私は今朝も、安満岳様に手を合わせてきましたよ」。



平

戸島の西海岸にある春日集落。のどかな

自然に囲まれ、どこか日本の原風景を感じさせるこの集落には、信仰の歴史が息づいている。

約四百六十年前、生月島と

同様に春日集落の住民もキリスト教に一斉改宗し、日本に

おける初期のキリスト教布教の地となった。後にキリスト

教は禁止されるが、人々は仏

教や神道を受け入れながら、

密かにキリストの信仰を継承。そして禁教が解かれた後もなお春日の人々は「かくれキリスト」としてそれまで

の信仰を継承し続けた。

集落にある案内所「かたりな」を訪ねた。築七十五年の古民家で出迎えてくれたのは、

増田貞子さん。かたりなでは地元の人たちが地域のことや暮らしのことを話す“おもてなし”をしてくれる。



「かたりな」には、春日集落に伝わる納戸神と呼ばれるご神体を展示している展示部屋や、土産品などを販売している多目的・物産部屋がある。



「かたりな」では春日の水でいれたお茶でおもてなししてくれる。運がよければ、おばあちゃんたちの手作りのお漬物などが並ぶことも。

貞 子さんは春日集落で生まれ、結婚し、四人の子どもを育てた。若い時は苦労も多かったと振り返る。「私は姑を早くに亡くした上に舅は足が悪かつたため、子どもが小さいうちは、夫と二人すべての仕事をしなければなりませんでした。昼間は

が追い付かず、夫と二人で月夜の晩に朝まで鎌で稲刈りをすることもあります。あの日のは忘れられません」。そ

れでも楽しい時代だったと貞子さんは笑う。「どこへ行くのも近所の人と誘いあって、集落の人たち皆が仲良しでした」。

田んぼ、夜は櫓を漕いでイカ

釣り、大潮の日は天草やワカメを探りに海岸へ……とにかく忙しい日々でした。仕事

があり、集落の人々が皆集まりました。男の子たちは相撲をとり、女の子たちは歌を歌いました。良い思い出ですね。

丸尾様は田んぼの神様ですか

ら『良いお米ができますよう

に』とお参りします」。

集落に古くからある家には神棚と仏壇の他、納戸神が祀られている。貞子さんの嫁

兄と姉は父に連れられて、中江ノ島へ行っていました。

中江ノ島は春日の沖合約二キロに浮かぶ島で、禁教時代、主なキリストian信者が処刑さ

れた島で、聖地とされており、かくれキリストian信者が聖水を汲む行事が行われている。

「父は『聖水を汲む場所はいつも水が流れているわけではなく、拌んだら水が出てくる』ことがありました」。

信仰についての記憶はいくつもある。「小さい頃、私の

兄と姉は父に連れられて、中江ノ島へ行っていました。

江ノ島は春日の沖合約二キ

ロに浮かぶ島で、禁教時代、

中江ノ島は春日の沖合約二キ

ロに浮かぶ島で、禁教時代、

中江

春

日集落の見どころは、なんと言っても棚田だ。丸尾山から見る、山から海へと連なる一面の棚田は絶景で、見る者を圧倒する。そしてどこまでも続く石垣に先人たちの生きる力を見る。

春日の棚田は豊かな森に囲まれた安満岳から流れ出る水を利用して拓かれたという。春日の人々は、まさに「安満岳様」の湧水に生かされている。貞子さんが米や苗のことを「お米様」「お苗様」と呼ぶ気持ちが分かるような気がした。

貞子さんの話は尽きない。子どもたる頃、舗装されていない道を毎日六キロも歩いて小学校へ通つたこと、畑で育てている野菜の話、健康の秘訣に長生きの秘訣…。泣いたり笑つたりして過ごした八十八年の人生に耳を傾ける時間は、なんとも心地よい。

春日集落の稲刈りは早く、お盆前には刈り終わるという。貞子さんは、最後にこう言つて見送ってくれた。「今度は田んぼにお米様がいらっしゃる時においでください。黄金色に色付いたお米様が揺れて、本当にきれいでですよ」。

丸尾山では、十六世紀と思われるキリスト教墓が多数見つかっているという。当時、墓地には十字架が立てられることが多かったことから、丸尾山の頂上にもかつて十字架があつたと考えられている。その場所に今あるのは、小さな祠。丸尾山の神様は美しい棚田を、そして春日の人々の暮らしをそつと見守っている。

今度は田んぼに
おいでください

嘗みに
出会う旅 ①

春日集落案内所 かたりな

平戸市春日町166-1
TEL.0950-22-7020
開館時間／
8時30分～17時30分
休館日／
12月31日～1月3日

春日町はその文化的で豊かな景観の価値が認められ、国の重要文化的景観に選定されている。

黒島教会

佐世保市本土から西約十二キロ離れた黒島は、移住した潜伏キリシタンが平戸藩の牧場跡を開拓して密かに祈りを続けた地。禁教が解かれ後、カトリックに復帰した信徒たちはマルマン神父の設計をもとに黒島教会を建立した。



異文化と出会ったまち

長崎市



平戸、横瀬浦、そして福田から長崎へ。

ポルトガル船が来航した港のそばには新しいまちが生まれ、たくさんの教会堂が建てられた。さらながら小ローマのようだった長崎のまちにも、やがて禁教の高札が掲げられる。

国際貿易都市として華やいだ時代。

その陰には、信徒発見までの長い道のりがあった。



History

一五八〇年 大村純忠が長崎と茂木をイエズス会に寄進

一五八七年

豊臣秀吉が伴天連追放令を発布

一五九七年

二十六聖人が西坂の丘で殉教

一六一四年

江戸幕府が全国に禁教令を発令

一六四四年

国内最後の神父が殉教し、国内に不在となる

一八六五年

信徒発見

一八六七年

浦上四番崩れが起ころる

一八七三年

キリスト教の高札が撤去される

長崎歴史

繁栄した都市
異文化交流の足跡

文化博物館



長崎歴史文化
博物館

無用な争いを避ける
そのための論理

一五七一年、ポルトガル船が初めて長崎に入港したのは、大村純忠といエズス会が開港協定を結んだ翌年だった。禁教により海外交流が厳しく制限されても、オランダ船や唐船が来航し、長崎のまちは国際貿易都市として華ひらくことになる。出島や唐人屋敷を起点に様々なモノやコトが行き交うようになつた時代。禁教の下、異なる民族はどのように共生していたのだろうか。

長崎歴史文化博物館の学芸員・深瀬公一郎さんは次のように語る。

「江戸時代の長崎には異なる民族や文化、宗教が衝突することなく暮らせる仕組みがありました。出島や唐人屋敷など交流の場を限定した居留地がそのひとつです。また奉行所の役人や町人も、浦上村の人々がキリストンであることには薄々気づいていたけれども、見て見ぬふりをして

いたのではないでしょうか。キリストンは邪宗であつてここにいる人々は異宗。邪宗は幕府に反抗するけれども、異宗はそんなことはしない。無用な争いを避けるための論理の下で、共に暮らしていたのです。その頃の長崎のまちは、多様性に寛容なまちだったので。しかし幕末になりふたび外国人宣教師が現れると、浦上の信徒たちは信仰を告白し、新たな展開を迎えることになりました」。

長崎のキリストン史を語る場合、厳しい弾圧や迫害の歴史に目を向けることが多い。その一方で「長崎には他者排斥せず受け入れて融合する文化がある」と深瀬さんは考える。

西洋との出会いいや貿易と都市の繁栄、人々の交流など長崎のまちを舞台に繰り広げられてきた多様な歴史の真実。長崎歴史文化博物館では、それらのポイントについて貴重資料や分かりやすい解説とともに紹介している。

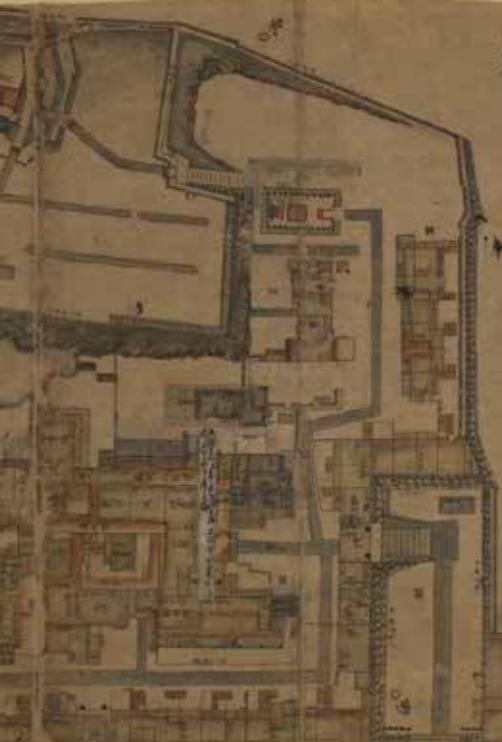
奉行所時代へ タイムスリップ



緑豊かな長崎公園の一角、長崎歴史文化博物館が位置する場所にはかつて長崎奉行所立山役所があった。そしてさらにさかのぼると「山のサンタ・マリア教会」が建っていた。江戸幕府直轄領の中でも、長崎奉行所には町政や市中巡見、長崎貿易の管理・統制、キリストンの取り締まりなど重要職が任せられていたと

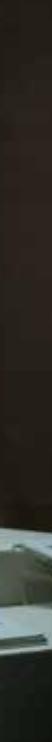
いう。

博物館が建設される際には発掘調査が行われ、立山役所の石垣や石段の一部が出土。それらが現地で再利用されているほか、建物自体にも奉行所時代を彷彿とする仕掛けが施されておりタイムスリップした気分で楽しめる。設計を担当した世界的建築家・黒川紀章氏（故人）が奉行所の内部を調べるうえで参考にしたのは、一八〇八年に描かれた絵図『長崎諸官公衙図』だった。奉行所を“実



長崎諸官公衙図

路絵(東京国立博物館蔵)



マリア観音像(すべて東京国立博物館蔵)

長崎のまちは、小さいながらも見どころが溢れている。観光の際には、予習のためにまずここを訪れてみるのもいい。もしくは観光地を巡った後、気になつたり疑問に感じたりしたポイントの答え合わせをするのもいいだろう。

物大の展示品“と捉えた黒川氏は、絵図に記された間取りから奉行所の一部を現代によみがえらせた。また常設展示室には、踏絵などキリストンの取り締まりに使われたものが展示されており、奉行所があつた事実を垣間見ることができる。



長崎歴史文化博物館

長崎市立山1丁目1-1
TEL.095-818-8366
開館時間／8時半～19時
(12月～3月は18時閉館)
※いずれも最終入館は30分前まで
休館日／第1・3月曜
常設展観覧料／大人630円、小中高校生310円
※入館は無料



收藏品

Collections

人々に影響を与えた西洋文化の輝き



泰西王侯図屏風
(イエズス会セミナリヨ画学舎)

一六二二—一六一四年頃

重要文化財(国指定)

全十二図からなり、一六一〇年以降西洋で出版された銅版画をもとに制作された。当時の宣教師たちは、日本の武将たちから西洋の武人の武装姿や戦闘の様子が分かる作品を求められたといわれ、この作品も要求に応えるために制作されたものだ。長崎のイエズス会セミナリヨ画学舎でジヨンニコラオの指導のもと描かれたとを考えられている。また、盾に記された「HIS」に十字架をつけた模様は、イエズス会の紋章。現存する初期洋風画「世俗画」の画中内に、イエズス会との直接的な関係を示すものは本作以外にはない。



弾琴図

一五九六—一六一四年

日本人が見よう見まねで制作した西洋風の絵画を「洋風画」と言う。この作品は初期洋風画に属し、作者はイエヌス会で学んだ日本人画家と思われる。石造りの建物のそばで、西洋婦人がリュートを弾いている様子が描かれている。



四季彩洋櫃
螺鈿時繪

桃山時代

スペインやポルトガルのバル
ゲニヨ(化粧箋箇)をモデル
にして日本で制作された輸
出品。薄絵や螺鈿細工による
きらびやかな装飾が、南蛮
ブームに華やいだ時代を物
語っている。

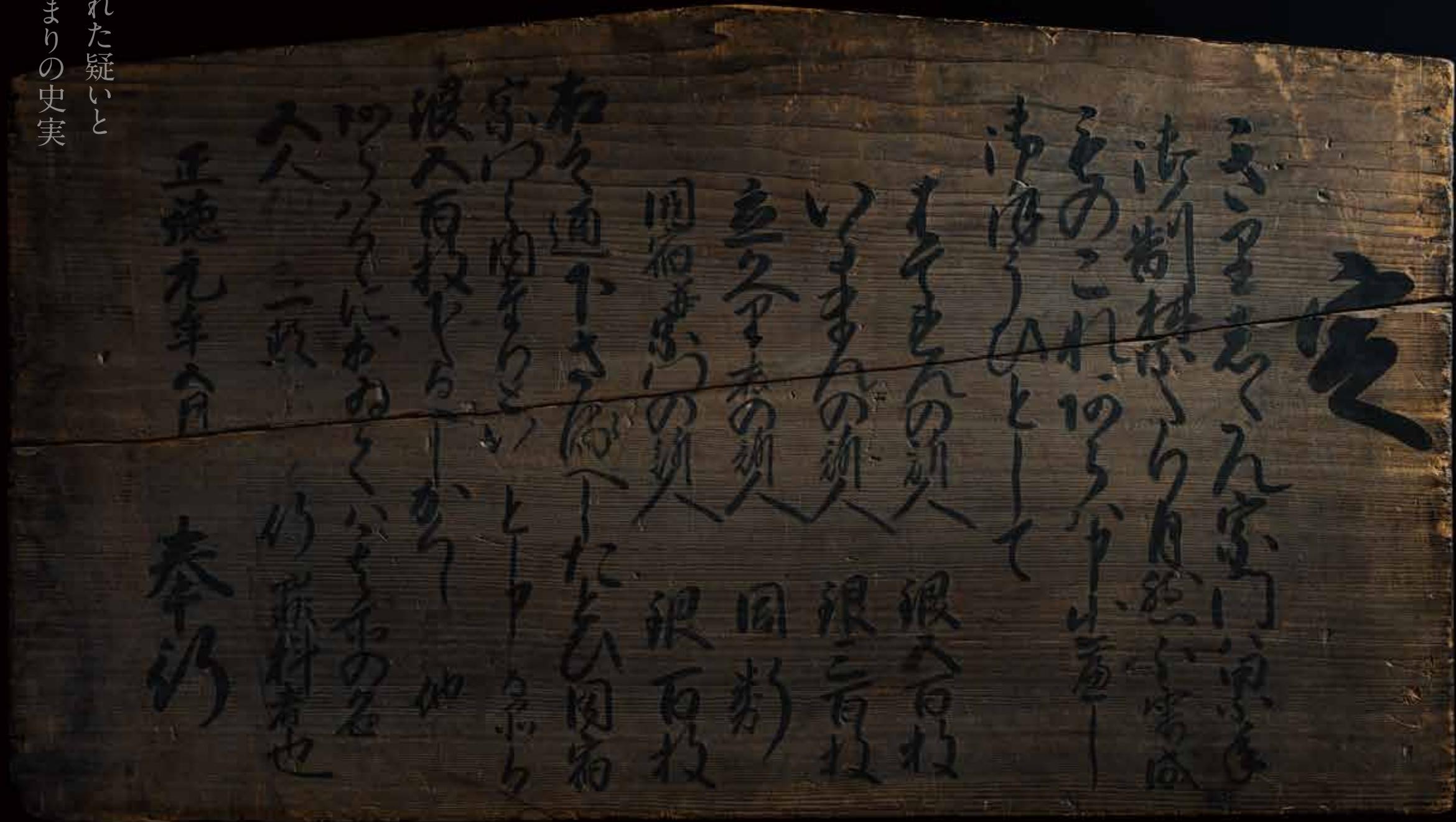


伊東マンショ
肖像画

一五八五年

大友宗麟の名代として天
正遣欧使節に参加した伊
東マンシヨ二〇〇五年十一
月にローマのグレゴリウス十
三世の生家で発見された
作品は、当時十五歳か十六
歳のマンシヨがやや右側から
描かれている。木炭デッサン
した顔のみに淡い水彩
がほどこされており、マン
シヨ单独でここまで精巧に
描かれているものはない。この作
品のほかにはない。

向けられた疑いと 取り締まりの史実



キリスト教
（正徳元年）

一七一年
キリシタンを摘発した者に
対して懸賞金を支払うこ
とを告知。ほどでれんには
銀五百枚、いるまんには
銀三百枚の懸賞金と記さ
れている。

受け継がれる心 ②

四百年の時を超えて 語りかける サント・ドミニゴ教会

一六〇〇年前後の長崎のまちは「小ローマ」と呼ばれるほどに、いくつもの教会が建ち並んでいた。その一つが、現在の桜町小学校(旧勝山小学校)の場所にあった「サント・ドミニゴ教会」だ。

サント・ドミニゴ教会が建っていた期間はわずか五年。にもかかわらず、二〇〇〇年に行われた発掘調査では聖母像が彫られたメダイや真鍮の十字架、八十枚を超える数の花十字紋瓦などが出土し、専門家たちを驚かせた。

教会が建っていた場所は現在、資料館になってしまっており、教会遺構がそのまま展示されている。長崎のまちで「小ローマ」と呼ばれた頃の面影を探すのは難しい。しかしここに立てば、四百年の時を超えて、歴史の息づかいが聞こえてくる。

サント・ドミニゴ教会跡資料館

長崎市勝山町30-1(桜町小学校内)
TEL.095-829-4340 開場時間／9時～17時
休館日／月曜日、12/29～1/3 入館料／無料



大浦天主堂 キリストン

Oura
Church
Christian
Museum

再布教期以降の
長崎とキリスト教史

江戸から明治へ
変貌した町の動き

安政の五カ国条約により、一八五

九年以降アメリカ、オランダ、ロシ

ア、イギリス、フランスとの对外貿

易が本格的に始まつた長崎。増加す

る外国人に対応するため、南山手、

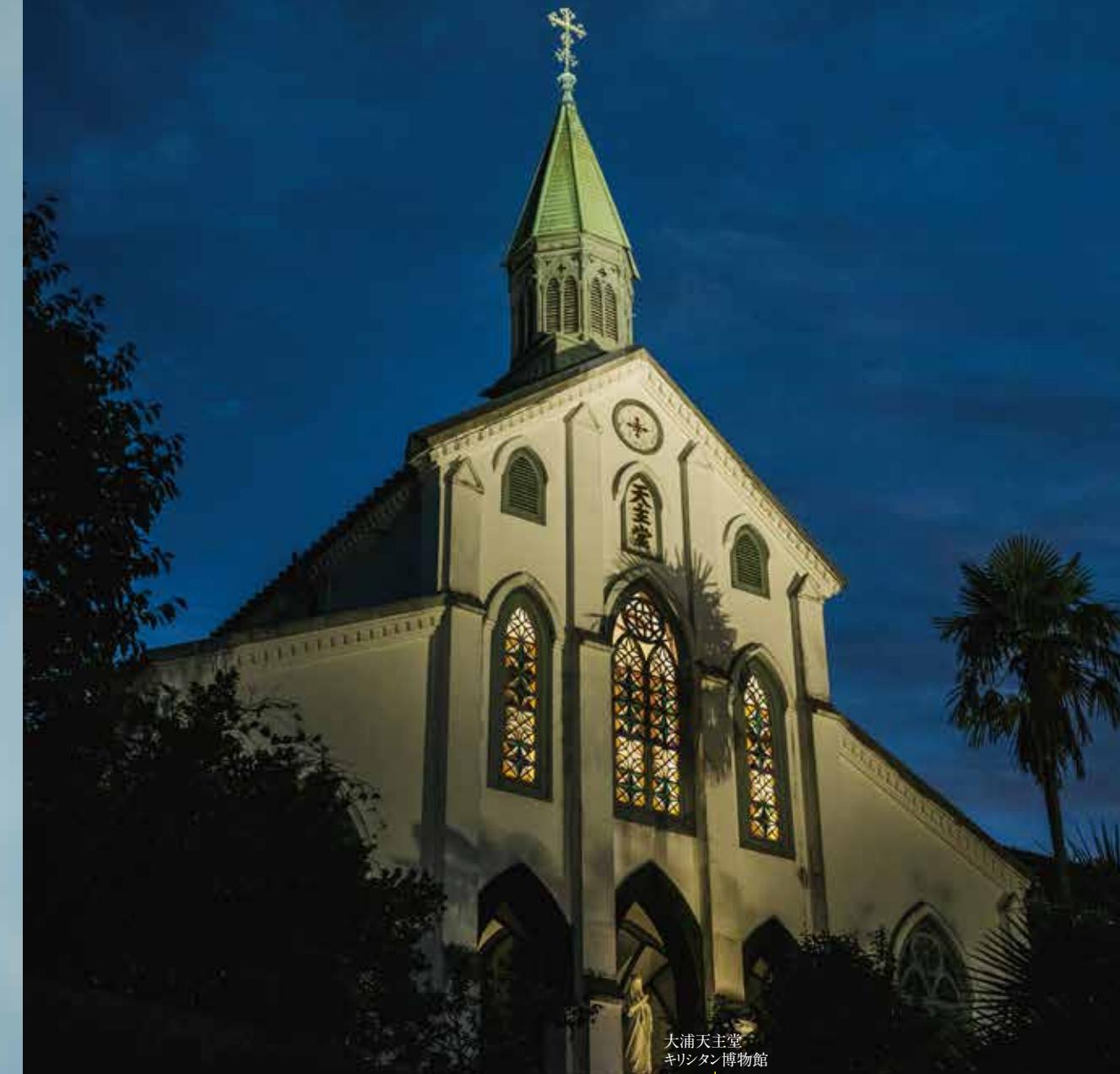
東山手、大浦に居留地が造成され、
外国人信徒のために大浦天主堂（通
称フランス寺）が建てられた。変貌
するまちの空気は、潜伏していたキ
リストンの心を突き動かしたのだろ
う。大浦天主堂を訪れた浦上村の信
徒は、ブティジアン神父にこう伝え
たといふ。「サンタ・マリアの御像
はどう」。信徒発見後、ふたたび激
しさを増したキリストンに対する弾
圧、そしてキリスト教の再布教。キ
リストン禁制の高札が撤去されたの
は、一八七三年のことだった。

信仰告白の場となつた大浦天主堂

博物館



現存する日本で最古のカトリック教会堂。
西坂の丘で殉教した日本二十六聖人に捧げられた教会でもあることから、
殉教地（西坂）の方向に向けて建てられている。



の境内には、二つの建物が佇んでいます。旧羅典神学校と旧長崎大司教館です。現在は大浦天主堂 キリスト教博物館として活用されており、訪れた人々に西洋との出会いや禁教・潜伏期の歴史、信徒発見に至る日本のキリスト教の再布教期以降に集められたもの。ド・ロ神父が制作したド・ロ版画『善人の最期』など布教に用いられたものや、カトリックに合流したのを機に信徒から託された信仰用具なども含まれています。

印刷事業を担当していたド・ロ神父の多才ぶりは、この二つの建物にも表れている。現在、国の重要文化財に指定されている旧羅典神学校は、禁教が解かれた二年後に建設。一九一五年には二代目の長崎大司教館が建てられ、いずれもド・ロ神父が設計を手がけた。外壁に取り付けられた“よろい戸留”など、フランス仕込みの意匠も建設時のまま大切に保存されており、建物そのものが貴重な宝といえるだろう。学芸員の島由季さんは次のように語る。「長崎で親しまれているド・ロ神父が手がけたデザインと日本人大工による漆喰や瓦、レンガなどを用いた和洋折衷の美をご覧いただけます。また展示を通して、キリスト教の全容を学んでいただけるほか、日本におけるキリスト教の再布教期にあたる時期に、長崎が果たした役割についても理解していただけるでしょう」。

世界文化遺産に登録され多くの観光客が訪れる大浦天主堂。潜伏していたキリスト教たちに一筋の光をもたらした祈りの地は、現在に至る道のりを深く知るほどその存在の尊さに気づく。



大浦天主堂 キリスト教博物館

長崎市南山手町5-3 TEL.095-801-0707
開館時間／8時半～18時(11月～2月は17時半閉館)
※いずれも最終入館は30分前まで
休館日／年中無休
(教会行事や展示替えなどで休館する場合があります)
入館料／大浦天主堂拝観料に含む
(大人1000円、中高生400円、小学生300円)



旧長崎大司教館



旧羅典神学校



元和の大殉教図



ド・ロ版画《善人の最期》

一八七五年—一八七九年

一八七五年から一八七九年に制作された通称「ド・ロ版画」。布教の際に教義を分かりやすく説明するための教義図と、教会ならぬ祈りの空間を飾るための聖人図が五種類ずつあるうちの教義図の一つ。信徒が死を迎える前に、司祭により最後の秘跡を受ける様子が表されている。



収蔵口口

Collections

ふたたび始まつた
布教活動が
信徒たちに光をもたらす



司教杖と手袋

十九世紀一二十世紀

杖

司教が儀式の際に手にする。フランス系イエズス会が設立した上海の孤児院には子どもたちに技術を習得させるための工房があり、この杖はそこで作られたもの。
司教が特別なミサの際に使用。赤色はかに白、緑、紫、黒、パラ色があり、典礼によつて身に着ける色が異なる。

ミトラ

年代不明

司教が典礼の際にかぶる冠。

司教司牧書簡

十九世紀

十字架上のキリスト像

年代不明

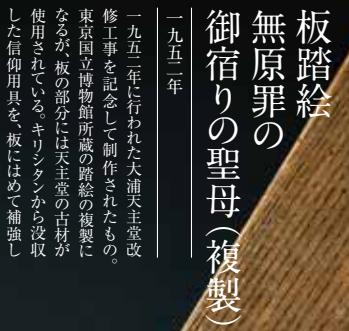
はりげ
磔にされたイエス・キリスト
像。もともとは十字架に固定
されていたと思われる五
島市奈留島のかくれキリシ
タンが代々受け継いでいたも
のと伝わる。



ロザリオ

十九世紀一二世紀

一九〇七年に出津教会の助祭として赴任した中村吾作神父が、当時主任司祭を務めていたドロヘンダル神父から贈られたものと伝えられる。三角金具には「不思議のメダイ」が表されている。



板踏絵
無原罪の
御宿りの聖母(複製)

一九五二年
一九五一年に行われた大浦天主堂改修工事を記念して制作されたもの。東京国立博物館所蔵の踏絵の複製になるが板の部分には天主堂の古材が使用されている。キリスト教から没収した信物用具を、板にはめて補強したものを作成した。



受け継がれる心 ③

モツテコーオの掛け声が 響き渡る二日間 伝統の長崎くんち

“おすわさん”的愛称で親しまれている諏訪神社の秋の大祭、長崎くんち。一六三四年から続く祭礼は二人の遊女、高尾と音羽が諏訪神社の神前に謡曲「小舞」を奉納したことが始まりといわれる。

現在は毎年十月七日（前日）・八日（中日）・九日（後日）の三日間にわたり執り行われ、見どころは長崎市内五十八か町の中から、その年の当番町が奉納する絢爛豪華な演し物。龍踊や鯨の潮吹き、コッコデショなど特色

ある奉納踊は、国的重要無形民俗文化財に指定されており、その中には唐人船、阿蘭陀船、龍船など船をモチーフにした演し物も少なくない。

かつて長崎のまちに繁栄をもたらした海の道。伝統ある祭りは、様々な民族が船を使って行き來した海外交流の歴史を今に伝えている。



長崎の伝統文化が 咲き誇る 華やかなおもてなし

朱塗りの円卓を囲んで、大皿に盛られた料理を各人が小皿に取つていただく卓袱料理は、江戸時代に国際貿易の中心であった長崎で発展した、華やかな宴会料理。日本料理をはじめボルトガル、中国、東南アジア、オランダなど異国の料理が融合した長崎独自の伝統料理だ。

現在、卓袱料理は長崎市内の料亭でいただくことができる。宴を盛り上げてくれるのは、艶やかに舞う長崎檢番の芸子衆たち。かつては江戸の吉原、京の島原と並ぶ三天花街と謳われた長崎丸山で芸の道に生きる彼女たちは、この地が育んできた伝統文化そのもの。長崎のおもてなしは、皆で一つのテーブルを囲んで過ごす和やかな時間の中にある。



スペイン美術の 真髓に迫る

須磨コレクション

長崎を貿易の拠点として選んだのは、フランシスコ・ザビエルとともに来日したスペイン人宣教師コスマ・デ・トーレスだった。以来始まった長崎とスペインの交流は、ある日本人男性が所有していた美術品が長崎に渡る要因にもなる。

第二次世界大戦中、特命全権公使としてスペインに赴任した須磨彌吉郎という人物がいた。長崎県美術館が誇る『須磨コレクション』は、須磨が在任中に現地で収集した美術品によって構成されている。須磨は長崎出身ではない。息を引き取る約十日前に「スペインとゆかりの深い土地へ」と自らの意思で長崎県に寄贈したという。

かつて須磨がスペインで収集した美術品は千七百点以上にのぼり、長崎県美術館はそのうちの約五百点を

所蔵している。学芸員の森園敦さんはスペイン美術の魅力をこう語る。「フランスやベルギーのような華やかさではなく、むしろ暗い印象を持たれています。その一方で、華美な装飾がそぎ落とされることによつて、描かれた対象の本質がストレートに観る者に伝わってくるでしょう」。また森園さんは「須磨の存在が新たな交流をはぐくむ架け橋になつてゐる」とも話す。「当時のスペイン政府は、コレクションの返還交渉の過程で、須磨が所有していた美術品の中から歴史的に重要なものを買い上げました。現在それらの作品はプラド美術館などで展示されており、私たち長崎とスペインの文化交流の懸け橋としての役割を担っています」。

長崎水辺の森公園に隣接する美術館の目の前には、かつて異国人人々が目指した長崎の港が広がっている。海を隔ててはぐくまれてきた交流の歴史は、先人たちが遺した美術品を通じてこれからも続していく。



長崎県美術館

長崎港を一望
景観と調和した
憩いのアート空間

Nagasaki
Prefectural
Art
Museum

長崎県 美術館

写真左／常設展示室。須磨コレクションをはじめとする近現代のスペイン美術に加えて、洋画・工芸・日本画・写真・版画など長崎ゆかりの作品も展示している。



長崎県美術館

長崎市出島町2-1
TEL.095-833-2110
開館時間／10時～20時
休館日／毎月第2・第4曜曜日、
(休日・祝日の場合は火曜休館)、
12月29～1月1日
コレクション展観覧料／一般420円、大学生310円、
小中高生210円、70歳以上310円
※入館は無料

收藏品

Collections

天正遣欧使節も謁見
スペイン最強時代の国王



フエリペ2世

作者不詳

一六〇〇年頃(須磨コレクション)
フエリペ2世は二十九歳の若さで国王に即位。スペインを政治的・経済的にヨーロッパ最強の王国にまで発展させたといわれている。本作では四十歳前後の相貌がほぼ等身大のサイズで描かれている。



原の城

一九七一年

舟越が原城跡を訪れた約十年後に制作。壯絶な戦いの地だったことをまるで嘘のように長閑な景色の中に、討死したキリスト教徒たちが立ち上がる姿を思い描いた。

彫刻家・舟越保武と長崎のキリストian

二十六聖人のためのデッサン
聖ルドビュ茨木

一九六一年

長崎二十六殉教者記念像の制作時に描かれたデッサンの中の一枚。二十六人の視点の向きなど構想を重ねた末に等身大の像が完成した。



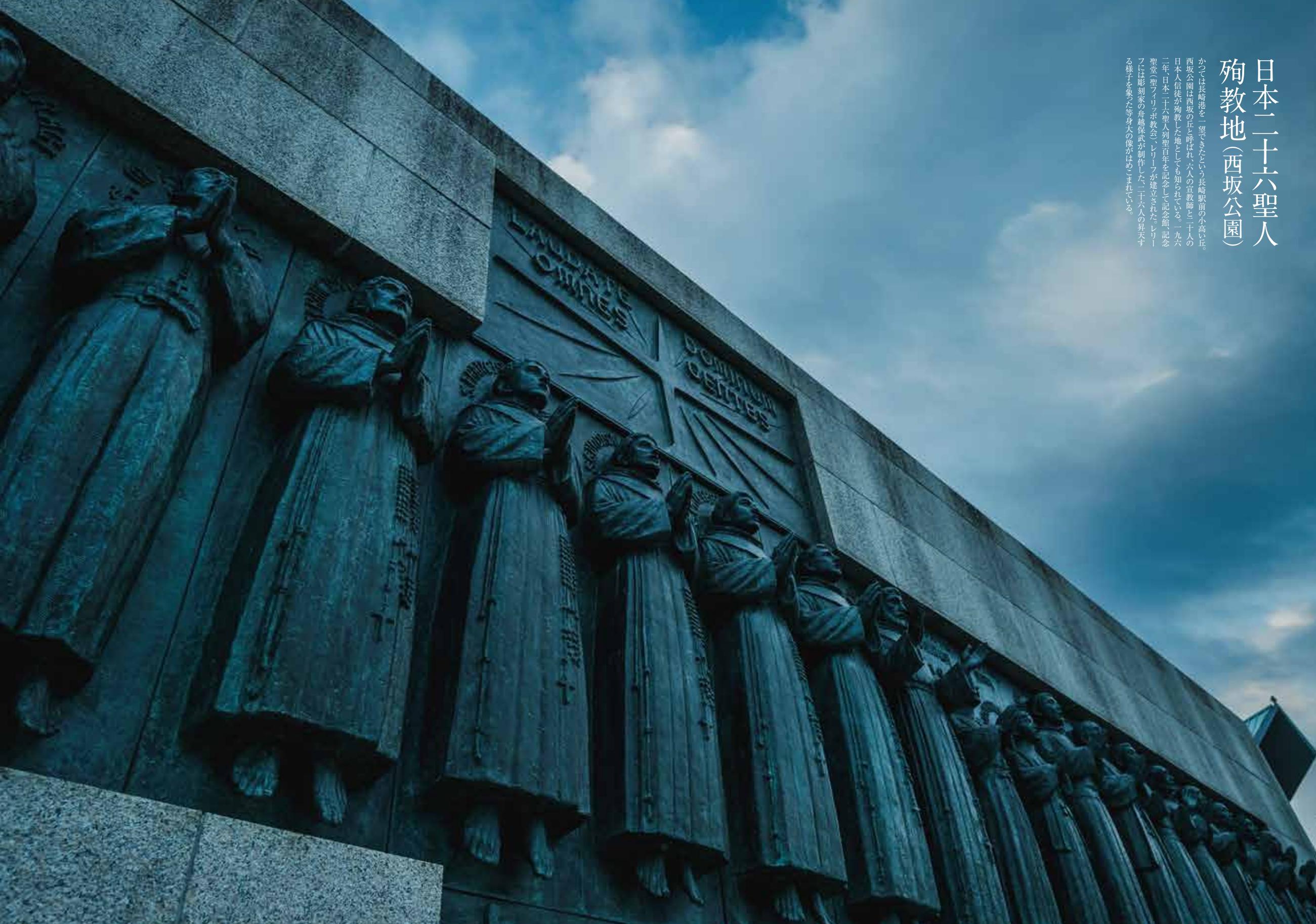
一九七一年

ブロンズ

舟越保武は長男の死をきっかけにカトリック信者となり、キリスト教に関連する作品を数多く制作した。西坂の丘で殉教した二十六聖人を象ったブロンズ像の作者としても知られる。

日本二十六聖人殉教地（西坂公園）

かつては長崎港を一望できたという長崎駅前の小高い丘。西坂公園は西坂の丘と呼ばれ、六人の宣教師と三千人の日本人信徒が殉教した地として知られている。一九六三年、日本二十六聖人列聖百年を記念して記念館・記念聖堂（聖フジツボ教会）、レリーフが建立された。レリーフには彫刻家の舟越保武が制作した二十六人の昇天する様子を象った等身大の像がはめこまれている。



史をもつ長崎には、それぞれの時代に外国人たちが暮らす居留地があった。ここでは東アジア交流史を専門とする長崎歴史文化博物館の深瀬さんと三つの居留地をめぐりながら、国際貿易都市・長崎の魅力に迫る。

出島はもともとキリスト教の布教を行っていたポルトガル人を収容する目的で、一六三六年、二十五人の有力な長崎町人たちによって築造された。その後、ポルトガル船の来航が禁止されると、彼らは平戸にあつたオランダ商館を出島へと誘致するが、深瀬さんはそうしたところに長崎町人の商売人気質がよく表れていると話す。「でもオランダにも大きなメリットはある



出島の敷地は約四千坪。端から端まで歩いてもすぐだ。深瀬さんは、この狭さこそが出島の最も大きな特徴だと言う。「日本では、出島は西洋との唯一の“窓口”と言われますが、グローバルな視点から考えると、長崎は世界の

ました。当時の経済の中心は中国。日本の銀は質が良く、中国では数倍の値が付きましたから、大きな利益が出ました」。

一二つの居留地

（出島・唐人屋敷跡・旧外国人居留地）

長崎歴史文化博物館 学芸員 深瀬さんと往く

**国指定史跡
出島和蘭商館跡**

長崎市出島6-1
TEL.095-821-7200
(出島総合案内所)
営業時間／8時～21時
(最終入場20時40分)
定休日／年中無休
入場料／大人520円、
高校生200円、
小・中学生100円

出島

江戸時代の
人になったつもりで
歩いてみましょう。



”貿易都市”的一つであり、繁栄を極めた魅力的なまちでした。しかしその国際貿易都市の拠点がこんなにも小さくて、狭い。そのギャップに驚かされます。

出島のもう一つの特徴は軍事的緊張感がないこと。「オランダは貿易を優先するため日本に徹底的に従う立場を取らなければなりません。一般的には外国人を狭い場所に閉じ込める行為は迫害といわれてしま



漢洋長崎居留図卷 部分(長崎歴史文化博物館蔵)
出島では様々な人種の人たちの交流があつたことが分かる。



肥前長崎図(長崎歴史文化博物館蔵) 3つの居留地はこんなに近くにあった!



現在、出島では16棟もの建物が復元され、19世紀初頭の姿を取り戻そしている。

出

島を後にし、賑わう

中華街を通つて唐人屋敷跡へと向かう。わずか十分ほどどの距離にオランダ人と中国人が暮らしていたことを思えば、改めて長崎は独特の歴史を有していると感じる。

唐人屋敷が造成されたのは一六八九年。市中にあふれていた密貿易を取り締まるため、中国人たちを一ヵ所に集める政策であった。

長崎奉行所の判決記録「犯科帳」の中で最も多い犯罪は「抜荷」、つまり密貿易である。



漢洋長崎居留図巻 部分
(長崎歴史文化博物館蔵)
唐人屋敷は出島の2倍ほど
の大きさで2階建ての瓦葺き
長屋が20棟あり、約2000人
の収容能力を持っていた。

唐人屋敷跡

営みに
出会う
旅 ②

深瀬さんは、抜荷が横行した背景には、船乗りたちの貿易があると話す。「当時、商人だけでなく船乗りたちも貿易をしていました。船乗りたちにとって貿易は魅力的な収入であり、優秀な船乗りたちが唐船に集まっていたのです。ですから唐人屋敷に閉じ込められ貿易が制限されると破産してしまうので、彼らは抜荷をせざるを得ませんでした」。

抜荷を取り締まりすぎると、船乗りが集まらず唐船は来ないと。時代のメインストリートが伸びている。「唐人屋敷という

名前は、長崎奉行が付けたものです。そこには、ここは決して『唐人町』ではなく、あくまで宿泊所、という意味がありました。しかし唐人屋敷が完成すると、中で屋台を出す中国人たちが現れ、数十年後には実質『唐人町』になりました。出島は商館ですが、唐人屋敷は町として機能していたのです。唐人屋敷の魅力は、こうした人間のたくましさにあるように思います」。



唐人屋敷跡には中国人たちが祈りの場として建てた土人堂、観音堂、天后堂が残っており、当時を偲ばせる。

オランダ坂の上に建つ東山手十二番館は1868年に建てられたもので、東山手地区に現存する最古の遺構。



旧外国人居留地

国情緒豊かな長崎を
異
実感するのが、東山
手・南山手エリア。石畳の坂
を上れば、洋館や教会が建ち
並び、風に乗つて船の汽笛が
聞こえてくる。まちは外国人
たちが暮らした頃の空気をま
とい、どことなく華やかだ。
横浜・函館とともに開港し
た長崎のまちに外国人居留地
が造成されたのは一八五九年
のこと。グラバーを筆頭に、

彼らは一攫千金を夢見て、長崎の地に足を踏み入れた。 「幕末には攘夷運動により、外国人が襲われる事件が起るようになります。居留地は外国人を守るために造られました。外国人を閉じ込めるために造った出島や唐人屋敷とは発想が逆ですね」。 こうして長崎のまちに三つ目の居留地が誕生した。そしてこれにより、造船と炭鉱とい

う新たな産業が生まれ、近代の長崎が形作られてゆく。開国後、出島は外国人居留地に編入され、唐人屋敷は焼失した。しかし長崎のまちはその面影が色濃く残っている。まちを歩けば朱色の唐寺が目を惹き、港を見下ろす丘への道はレンガ造りの壁が続いている。深瀬さんは「こんなに狭い範囲に三つの居留地がある

こと、また一つのまちが国際貿易都市として数百年続いたことは珍しい」と話す。「出島・唐人屋敷・外国人居留地によつて衝突を避けながら、長崎は国際貿易都市として繁栄しました。これは異文化交流の成功事例です。一方異文化交流の衝突が激しくなると戦争になります。なかでも原爆は人類史上、最大の悲劇の一つです。長崎は異文化交流

交流の光と影を知っています
この二つを同時に記憶している
まちというのは、世界中探
してもありません。私たちが
長崎の歴史と文化から学ぶこ
とは、たくさんあるのではな
いでしょうか」。三つの居留
市・長崎の姿を浮かび上がら
せてくれる。





青銅製箱型
十字架

十六世紀後半－十七世紀前半
表面に星、莢冠、金づち、釘抜きなど
「受難の道具」の模様が描かれた聖
遺物を収めるための容器。両面とも
に背景には「魚子文様」と呼ばれる
細かい斑点状の細工が施されている。
（有馬キリストン遺産記念館所蔵）

島原半島

キリストンから届く
メッセージ



島原半島の南端に位置する口之津の港に
初めてボルトガル船が入港したのは、
平戸から後れること十七年後の一五六七年だった。
大名によるキリスト教の保護のもと、多くの領民が受洗したもの、
やがて国をゆるがす大事件が勃発する。
海を望む廃城に集結した市井のキリストンたちは、
何を願い、守り抜こうとしたのだろうか。

History
一五七九年 巡察師ヴァリニャーノが口之津に来航
一五八〇年 有馬晴信が受洗。有馬にセミナリヨが建つ
一五八一年 天正遣欧使節が長崎を出発
一六一四年 江戸幕府が全国に禁教令を発令
一六三七年 島原・天草一揆が始まる
一六三八年 島原・天草一揆が終結する

受洗した晴信

有馬晴信の受洗を機に、キリスト教の布教が急速に広まつた島原半島。全国に点在するキリシタン墓碑のおよそ八割が集中していることからも、多くの領民がキリスト教を信仰していたことが分かる。

南島原市は、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産のひとつ原城跡を擁するまちだ。かつて晴信が居城とした日野江城下には、修道者育成の中等教育機関「セミナリヨ」が開設され、ここで学んだ四人の少年たちが、長崎の港からヨーロッパへ渡った。輝かしい功績を手に、約八年半の旅を終えて帰国した四人だったが、待っていたのは伴天連追放令が發布された後のキリシタンへの逆風だった。その後の有馬晴信の失脚、徐々にエスカレートしていくキリシタンに対する弾圧、藩主松倉勝家による重税と圧政、そして飢饉。国内のキリシタン弾圧を加速させる引き金に

なったといわれる島原・天草一揆は、様々な要因が重なった末に、蜂起せざるを得なかつたキリシタンたちの戦いだった。

出土品から読み解く 島原・天草一揆

一九九二年に始まつた発掘調査によつて、原城に立てこもつていた一揆勢の遺骨やキリシタン信仰用具などが多数出土している。有馬キリシタン遺産記念館では、原城築城や一揆の様相を明らかにする貴重な出土資料や歴史資料を展示。弾圧が始まつた以前の西洋とのつながりや、信仰

遺産記念館

Arima
Christian
Heritage
Museum



有馬キリシタン遺産
記念館



有馬キリシタン

光から影の時代へ
移り変わつた
島原半島のキリシタン史



の歴史も詳しく紹介している。

「大切に持っていた信仰用具とともに最期を迎えたのでしょうか。遺骨のそばからは、メダイや十字架が出土しています。その一方で、すべての一揆勢が篤い信仰心を持って、籠城していた訳ではなかつたようです」と学芸員の中山和子さん。一揆勢が幕府側に放つた矢文には、次のような文面が綴られており、なぜ彼らが蜂起しなければならなかつたのか、切迫した状況を窺い知ることができる。



有馬晴信木像(複製)

発掘調査状況の一部を型取りし、再現したレプリカ(実物大)。本丸への最初の入口になる正門付近にあたり、調査前は石垣がまったく見えない状態だった。一揆が終息した直後に二度と拠点にならないよう、幕府軍が破壊したと思われる。キリシタン遺物や人骨が出土している。



く苦戦を強いられたエピソードは、あまりにも有名だ。その理由は、原城が高さ三十一メートルの断崖に築かれた、周囲約四キロメートルにおよぶ巨大な城だったこと。戦国の世が終わり、戦に不慣れだった大名たちの力量不足が関係したとも考えられている。また、一揆勢にとつて最も強の武器は、銃でも刀でも弓矢でもなく石だった。

草木が青々と茂り、対岸に天草諸島を望む原城跡。かつてここを砦にしながら、平穏な暮らしを求めて散つていった人たちがいた。資料を通じて彼らの死闘を知れば知るほど、切なさが胸に込み上げてくる。

※令和八年度中に新たなガイドンス施設をオープンします。ご来館の際は、事前にお問い合わせください。



有馬キリストン遺産記念館

南島原市南有馬町乙1395
TEL:0957-85-3217
開館時間／9時～18時
休館日／木曜、12月29日～1月3日
入館料／大人300円、
高校生200円、小中学生150円

南蛮船



日野江城跡出土品・中国の陶磁器(法花)



日野江城跡出土品・金箔瓦



龍の飾り瓦



原之城乘吟味帳

メダイ

十六世紀後半 - 十七世紀前半
キリスト教の聖品として聖母マリアやキリストなどが描かれた金属製のメダル。ポルトガル語の「Medalha」が語源と考えられている。原城跡から出土したメダイは主に真鍮製。すべて梢円形で、横両縫部と下縫部に突起物が付くものと付かないものに分けられる。



收藏品

Collections

原城本丸から発掘
形なき城跡が伝える
キリシタン信仰の姿



鉛製の十字架

十七世紀前半

籠城していた一揆勢が火縄銃の鉛弾を溶かして作った十字架と考えられている。原城跡から出土した十字架はロザリオに付属するものが主体となる。

火縄銃の銃弾

十七世紀前半

原城跡から多数出土しており、鉄製も一部はあるものの大半は鉛製。未使用のものや実際の使用を示すように平たく潰れたもの、変形したものが出土している。

十字架

十六世紀後半—十七世紀後半
通常、十字架の縦孔は縦軸の上部にあるが、この十字架は下部に穴があけられている。キリスト時代の十字架はザリオに付く十字架と吊し用の十字架があるとされ、ザリオに付く場合は上下が逆方向になる。この十字架もザリオに取り付けられて使用されていた可能性がある。



砲弾

十七世紀前半
島原天草一揆の際に使用されたと思われる。幕府軍の記録には江戸から大量の武器や弾薬を送ったことが記されており、原城に向けて激しい砲撃や射撃が行われたことが分かる。



花十字紋瓦

十六世紀末—十七世紀初

特徴はキリスト教を象徴する花十字文様。当時のキリスト教徒は聖性を帯びた遺物として認識し、信仰用具として使用。一揆勢が原城に持ち込んだと思われる長崎、島原半島、大村など各地で出土している。





原城 包囲陣型図

江戸時代前期 近藤氏所蔵

寄託・南島原市教育委員会

島原天草一揆勃発から原城落城までを描いた絵図。平戸藩主が描かせたものと思われる。本丸部分には、益田四郎家の記述があり、一揆勢の総大将益田四郎(天草四郎)がいたことが分かる。また蓮池付近には、一揆勢が投げたと思われる臼や茶わんが描かれている。

原城跡

○原城は一五九九年頃にかけて、有馬晴信によつて築かれた城郭。本丸は石垣に包まれ、織田信長や豊臣秀吉の時代に流行した石積み技術が用いられていたが、有馬氏に代わつて新しく領主となつた松倉氏が島原へ居城を移し、原城は廢城となつた。現地では本丸跡の一部をVRで再現。スマートフォンなどを利用して当時の様子を体感できる。





受け継がれる心 ⑤

南島原からローマへ 歴史をたどる 現代の天正遣欧使節

その昔、セミナリヨが置かれたとされる場所は、現在の南島原市北有馬町にある。南島原市では、二〇一二年から地元の中学生を対象にセミナリヨの授業を再現している。授業を体験した中学生の中から四人をイタリアへ派遣。パチカンを訪問する際には、四百年以上前に少年たちが身につけていた装束と同じかたびら姿になり、ローマ教皇にも謁見するという。

十二月、北有馬のまちは戦国時代のクリスマスを再現するイベント「フェスティビタス・ナタリス」とともに華やかな光に彩られる。天正遣欧使節を含む行列が松明を手に練り歩く「南蛮行列」、巨大クリスマスツリーの点灯式など、手作りの祭りを通じてふるさとの歴史が語り継がれている。
(撮影協力…南島原市冬のお祭り実行委員会)



戦いの中で
生まれた具雑煮は
今や、郷土の誇り



島原の郷土料理といえば「具雑煮」。丸餅、白菜、ゴボウ、シイタケ、かまぼこ…と、色とりどりの具材がひしめく一品は家庭料理として、またおもてなし料理として親しまれている。具雑煮の発祥は「島原・天草一揆」といわれている。庄政、凶作、飢饉に苦しんでいた島原・天草の人々は一六三七年、三方を海に囲まれた原城に立

て籠もつた。その数、三万七千人。彼らはわずか十五歳の天草四郎のもと、八十八日間にわたって籠城を続けた。この時、様々な食材を煮炊きして作ったのが具雑煮の始まりだといわれている。皆に愛される郷土の味は、命懸けの戦いの中で人々の心を温めた特別な料理であった。

撮影協力：元祖 具雑煮 姫松屋（島原市）

雲仙地獄

長崎と上海を結ぶ航路が開かれ
ていた明治末期から昭和初期に
かけて西洋人に人気の避暑地で
もあった雲仙温泉街。雲仙地獄
はその中心部に位置し、大叫喚
地獄やお糸地獄、清七地獄など
三十余りの地獄がある。江戸
時代にはキリストン教の舞台
となつたことから、殉教碑も建立
されている。



南

島原市で近年、注目されているオルレ。韓国・済州島の言葉で「通りから家に通じる狭い路地」という意味を持つオルレは自然を身近に感じ、自分のペースで楽しながら歩くのが魅力のトレッキングのこと。地図を見なくても矢印やリボンを目印に歩くことができるため、いつでも誰でも楽しむことができる。

スタートは、気持ちの良い潮風が吹く口之津港。

口之津港は一五六二年に領主・有馬義直によって貿易港として開港以来、キリスト教布教と南蛮貿易の中心として栄えた歴史を持つ場所。港にはボルトガル船で口之津港に来航し、有馬のセミナリヨ設置や天正遣欧使節の派遣などに尽力したヴァリニヤーノ神父の銅像が建っている。

港を出て、昔ながらの商店街や住宅街を歩く。今回一緒に歩いてくれるのは中尾春菜さん。福岡県から南島原市に移住して十九年、まさにこの地域に魅せられた人だ。「この先から道が狭くなりますよ」と中尾さんが指さす方は、案内されなければ分からぬような細い路地。こうした普段は出会えないような道を歩くのもオルレならでは。

住宅街から山道へと入り、どんどん上ってゆく。すると突如目の前が開けた。畑の広がる先には、野田堤と烽火山。前半の見どころのひとつだ。標高約九十メートルの烽火山の頂上には、平安時代に大宰府に外敵などの情報を伝達する手段としてのろし釜が整備されたという。「秋にはこの辺りは一面レタスが植えられ、きれいですよ」と中尾さん。ボルトガル船が渡ってきた海とかつて烽火が上げられた山、そして手入れされた畑。そこには連綿と続く人々の嘗みがまるで一枚の絵のように広がっていた。

旅
出嘗みに
会う
③

南島原オルレ

潮風を感じながら
絶景に出会う

野田堤は16世紀後半に造られた人工のため池。
この辺りは、畑のあぜ道を歩いて進んでゆく。

素朴さと
雄大さを感じる
癒しスポット



中尾春菜さん。福岡県から南島原市に移住して十九年、まさにこの地域に魅せられた人だ。「この先から道が狭くなりますよ」と

中尾さんが指さす方は、案内されなければ分からぬような細い路地。こうした普段は出会えないような道を歩くのもオルレならでは。

住宅街から山道へと入り、どんどん上ってゆく。すると突如目の前が開けた。畑の広がる先には、野田堤と烽火山。前半の見どころのひとつだ。標高約九十メートルの烽火山の頂上には、平安時代に大宰府に外敵などの情報を伝達する手段としてのろし釜が整備されたという。「秋にはこの辺りは一面レタスが植えられ、きれいですよ」と中尾さん。ボルトガル船が渡ってきた海とかつて烽火が上げられた山、そして手入れされた畑。そこには連綿と続く人々の嘗みがまるで一枚の絵のように広がっていた。



あこう群落



分岐点には目印となる木製の矢印がある。

コ

ースの中には様々な絶景ポイントがあるが「幻の野向の一本松」もその一つ。昔は大きな古い松の木があつたそうだが、今は残念ながら枯れてしまい、その代わりに桜が植えられている。ここからは遠くは天草の島々まで見渡すことができ、写真スポットとしても人気だ。

次は海沿いを目指して歩く。瀬崎灯台からの景色を堪能した後に出会ったのは、あこうの群落。樹齢三百年を超えるという巨木は、思わず手を合わせたくなるような神聖な雰囲気をまとており、歩き疲れた身体にサラサラという葉音と木陰が実際に心地良い。

二十本ほどが立ち並ぶあこうの木のそばには早崎漁港がある。中尾さんは「実は私の自宅はこのすぐそばで、この漁港にはよく仕事終わりに釣りをしに来ます。近所のおばあちゃんたちと晩ご飯を釣るんですよ」と笑う。

仲の良い友人に会うために足を運んだのが南島原に来た最初だったと話す中尾さん。「移住の決め手は、皆が受け入れてくれたことです。例えば高齢

者の方の荷物を持つなど、私にとつては当たり前のことをした時に、この土地の方言で『ためになつた』、つまり『助けになった』と感謝されることが多く、必要とされたことを嬉しく思いました。南島原って、自分が知らない人でも自分を知つたり、誰かを通じて知り合いになつていつたりするんですね。それが私にとっては面白かったです。温かくて、皆と繋がっている感じがします」。

中尾さんは現在、南島原への移住を検討している人のサポートをする移住コーディネーターの仕事をしている。「島原半島はかつて島原・天草一揆によって多くの人が亡くなりました。その後、この半島には全国のいろいろな場所から人々が集まり、半島の半分は“よそ者”が暮らすまちになりました。そう考えると、島原半島は移住の最先端をいく場所なんですよ」。

海が見える家で犬と猫を飼い、家庭菜園を楽しんでいると話す中尾さん。「それに加えて近所を散歩すれば、オルレコースになるほどの絶景が広がっている。本当に豊かな暮らしです」。

営みに
旅出會う
③

南島原の人たちは皆フレンドリーで、すぐに仲良くなってしまします。



108

才

ルレではアスファルトの道だけではなく、畠のあぜ道や山道様々な道を歩くのも楽しみの

③ 営みに
出会う



原風景が残る

長崎市 外海地区



History

一五七一年	外海にキリスト教が布教される
一六一四年	江戸幕府が全国に禁教令を発令
一七九七年	大村藩と五島藩の間に農民移住の協定が成立
一八三七年	島原・天草一揆が始まる
一八六五年	信徒発見
一八八一年	ド・ロ神父が出津教会堂を建設

外海地区

急峻な地形を縫うように延びる

国道二〇二号を進むとのどかな風景が広がる。

ここはかつてキリスト教徒たちが密かに祈りをつないだ場所。

様々な苦難に見舞われながらも信仰を守り抜いた人たちや

新天地を求めて海を渡った人たちがいた。

彼らが見ていた夕陽は、今もなお大海原を美しく照らしている。

そしてキリスト教の里の営みを見守っている。



イナツシヨ様

十七世紀以降

長崎市外海歴史

民俗資料館所蔵

イナツシヨは、イエズス会の創始者の一人、イグナチオ・ロヨラのこと。潜伏期には、このような人物像をキリスト・マリア、聖人などに見立てて信仰用具にした。瓢箪を腰に下げて踊るユニークな姿から、もともとは中国の仙人などを象ったものと考えられている。

長崎市 外海歴史民俗 資料館

Sotome
Museum
of
History and
Folklore

外海から五島へ
海を渡ったキリストンたち

長崎市
外海歴史民俗
資料館



祈りを後世につないだ
独自の信仰形態

美しい海岸線に沿って集落が点在している外海地区。かつては山々が行く手を阻んだこの地にも、禁教期に信仰を守り抜いたキリストンたちがいた。野山を切り開き、畑を耕しながら生活していたキリストンにとって、信仰との深い結びつきは、心の安寧につながっていたのだろうか。二百年以上にわたった禁教期には、耕す土地がなくなるほど人口が増加した時期があり、大村藩と五島藩の主導による開拓移民政策をきっかけに、多くのキリストンが五島列島などへ移住した。

外海歴史民俗資料館は出津集落にある。旧外海町の時代から収集されてきた幅広い資料を通じて、外海地区の歴史や文化を紹介。かくれキリ

シタン信仰の様相を伝える貴重な資料

宣教師が不在になった後、その中には

るために使われたキリシタン暦

「日繰り帳」など、平戸・生月のか

くれキリシタン信仰には見られない

ものも少くない。ひとくくりには

できない、信仰の奥深さにふれるこ

とができるだろう。

ほかにも、十八世紀はじめに大村

藩主が西彼杵半島一帯で栽培させた

といわれる、サツマイモや加工品の

カンコロにまつわる解説など、五島

列島とのつながりを感じさせる展示

も特色の一つ。現代に残された資料

から、海を隔てて響き合うキリシタ

ンたちの想いが見えてくる。



長崎市
外海歴史民俗資料館

長崎市西出津町2800
TEL.0959-25-1188
開館時間／9時～17時
休館日／12月29日～1月3日
入館料／一般310円、小中高生100円
※ドロ神父記念館の入館料含む



外海系 かくれキリシタンの 実像を伝える

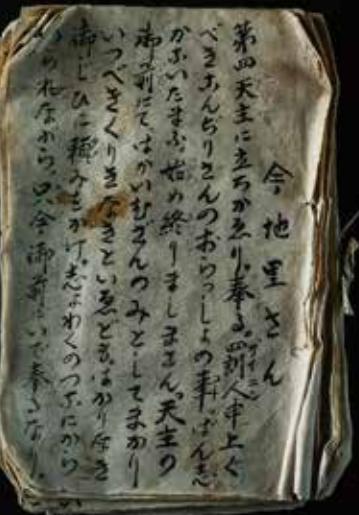
收藏品

Collections

ハンタマルヤ

(サンタマリア像)

十七世紀



オラショ本

「今地里さん」

（こんぢりさん）

一六〇三年 昭和時代写本

浦上・外海・五島列島・天草で伝承されたオラショ本の一種、「こんぢりさん」とはポルトガル語で「告解」を意味する。神父不在の中このオランゴを唱えることで罪が赦されることが考えられた。

バスチャンの椿

一八五六年以降

バスチャンとは禁教を境に不在になれた外国人宣教師の代わりに、キリストを指導した日本人伝道師。浦上三番崩れの際に、バスチャン由来の椿の木が伐採されると噂されたため事前に切り取って家々に分配された。





受け継がれる心 ⑦

素朴な味わい 大地を耕して育んだ 伝統の保存食

やせた土地でも、栽培しやすいといわれるサツマイモ。近年は品種が増えて、スイーツとしての人気も高まっている。しかしもともとは、庶民の暮らしを支える日常食。外海地区など西彼杵半島の日当たりの良い畑でも、古くから栽培されてきたといわれている。

長崎では、サツマイモを薄くスライスしゆでて、天日で乾燥させたものを“カンコロ”と呼ぶ。素朴ながらも、甘みが凝縮したカンコロは長期保存が可能。保存食として重宝される。また、五島列島や西彼杵半島などの各地域では、蒸したものにカンコロと砂糖を加えて、カンコロ餅を作る風習が残っている。ふるさとの食文化は、先人たちの暮らしの智慧から育まれたもの。大切な宝である。

撮影協力…出津農業舎

出津教会の屋根の上に立つマリア像は、
ド・ロ神父がフランスから取り寄せたものだという。

旅
嘗みに
出会う
④



ド・ロ神父の愛が語り継がれる 出津集落

をめぐる

ド・ロ神父はまず教会を建て、教会を中心とした村づくりを始めた。一八八二年に完成した出津教会はド・ロ神父自らの設計によるもの。風の強い斜面の台地に立つ教会堂は低平でどつしりとしながらも、優美さをたたえている。

祈りの場をつくったド・ロ神父が次に手掛けたのが、救助院の設立である。教会のすぐ下では、かつてのイワシ網工場、マカロニ工場、薬局が並ぶ旧出津救助院を見学することができる。

事故や病気で夫や息子を亡くした妻や母が多く、授産場はそうした女性たちや若い女性たちの自立を支援するために建てられた。ここではド・ロ神父の導きのもと織布、編み物、素麺、マカロニ、パン、茶、醤油や味噌の醸造など、様々な授産事業が展開され、女性たちは信仰とともに生活の糧を得たのだった。

赴任して最も驚いたことは、田畠に恵まれない厳しい自然環境の中で人々が信仰だけを頼りに貧しい暮らしをしていたことだつた。「魂の救済だけでなく、その魂が宿る人間の肉体、生活の救済が必要」と痛感したド・ロ神父はまず教会を建て、教会を中心とした村づくりを始めた。

一八八二年に完成した出津教会はド・ロ神父自らの設計によるもの。風の強い斜面の台地に立つ教会堂は低平でどつしりとしながらも、優美さをたたえている。

教期、多くの潜伏キリシタンの里は、作家・遠藤周作の心をつかみ、代表作『沈黙』の舞台となつたことでも知られている。美しい夕陽が沈むことから「ながさきサンセットロード」とも呼ばれる国道二〇二号を走れば、眼下には紺碧の角力灘。そしてその向こうには、潜伏キリシタンたちが夢見た五島列島が今も同じ姿で浮かんでいる。

禁

地区。海と山に囲まれたキリシタンの里は、作家・遠藤周作の心をつかみ、代表作『沈黙』の舞台となつたことでも知られている。美しい夕陽が沈むことから「ながさきサンセットロード」とも呼ばれる国道二〇二号を走れば、眼下には紺碧の角力灘。





D・ロ神父の設計による授産場の建物は当時のまま残されている。見上げると、フランスから取り寄せた鋳鉄製の金物や鉄のボルトが見え、この建物が西洋と日本の技術の融合で出来ていることが分かる。

案内してくださったシスターの赤窄誠子さんは、醤油や味噌を保管する地下の貯蔵庫や西洋風のドア、道具の数々はすべて当時のものだと教えてくれた。中にはド・ロ



神父考案のカンコロ切り機や素麺延し機といった自作の機械もあり、生産性向上のため様々な工夫をしていたことが伝わってくる。

フランスの貴族の家に生まれたド・ロ神父は幼い頃より高い教育を受け、農業、印刷、医療、土木、建築など、多岐にわたる技術を身につけた。

そして、そのすべてを外海地区の人々のために使った。赤窄シスターは「神父様は次々にご自分のアイデアをカタチ

にするのが楽しかったのではないかと思います。女性たちや村人たちの暮らしが少しづつ豊かになり、彼らの表情が生き生きとしてくる。それがギーとなる。こうした道具を見ていると、神父様ご自身が喜び、楽しんでおられたのではないかと感じます」。

主に女性たちの生活の場に使われたという二階に上がるシスターが奏でてくれたのは讃美歌「いつくしみ深き」。シスターが奏でてくれたのは響き渡る重厚で美しい音色が心の奥まで染み渡った。

出津教会堂の献堂を祝して贈った「ハルモニュームオルガン」と呼ばれる、当時最先端の高級オルガン。一九六八年まで、毎日のミサで使われていたという。「今も弾くことができるんですよ」と赤窄シスターが奏でてくれたのは讃美歌「いつくしみ深き」。シスターが奏でてくれたのは響き渡る重厚で美しい音色が心の奥まで染み渡った。



ド・ロ神父は日々の記録を金銭の出し入れを中心に、日誌形式で記入していた。こうした日誌が19冊残っているという。文字に几帳面さがうかがえる。



日本で初めてパスタが作られたマカロニ工場。当時、ここでは長崎の居留地に暮らす外国人からの注文を受けて、ド・ロ神父のレシピで女性たちがマカロニを製造していた。



(長崎市ド・ロ神父記念館所蔵)



(長崎市ド・ロ神父記念館所蔵)

イ ワシ網工場として建てられた建物は現在、「長崎市ド・ロ神父記念館」になつており、神父にまつわるあらゆる物が展示されている。印象に残ったのは、神父考案の洋式作業衣。フランス風のデザインを取り入れた作業衣は機能的でありながらオシャレで、これを着て立ち働く救助院の女性たちも嬉しかったのではないかと想像できる。

赤窄シスターは、ド・ロ神父は厳しくも明るく、楽しい方だったようだと話す。「神

父様が亡くなつて百年近くが経ち、直接関りをもつた方はいらっしゃいません。ただこの地域には、先祖から神父様のお話を聞いて育つた人たちがいます。その方たちの話を聞いてみると、皆が神父様に對して限りない感謝をしてい

ることが伝わってきます」。

授産場の二階には、三体の御像が飾られている。その内の一体、幼子を抱いた像はド・ロ神父がフランスから日本へ渡る際に、自ら持参したものだという。「この御像の

集落でよく見られる壁は赤土に石灰を混ぜたものと接合材として用いて、地域で産出される岩を積み上げた丈夫なもの。ド・ロ神父が考案したことから「ド・ロ壁」と呼ばれ、親しまれている。

父様が亡くなつて百年近くが経ち、直接関りをもつた方は子どもたちのための施設をつくった司祭として知られており、ド・ロ神父が大変尊敬していた方だと聞いています。ド・ロ神父は若き日に決意した「かよわき人々のために」という思いをして、ド・ロ神父は若き日に決意した「かよわき人々のために」という思いをして、

方へ渡る際に、自ら持参したたたかはその後一度も故郷の土を踏むことなく、七十四年の生涯を閉じるまで、人々のために尽くした。ド・ロ神父は今、自身が九年の歳月をかけて外海の信者たちのために造つた共同墓地に眠つている。



(長崎市ド・ロ神父記念館所蔵)

(長崎市ド・ロ神父記念館所蔵)

旧出津救助院

長崎市西出津町2696-1 TEL.0959-25-1002
開館時間／火～土曜9時～17時(最終受付16時30分)、
日曜(8/15, 11/7, 12/25)11時～17時
休館日／月曜(祝日の場合は翌日)、12/29～1/3
入館料／大人400円、中高生250円、小学生200円

**長崎市
ド・ロ神父記念館**

長崎市西出津町2633 TEL.0959-25-1081
開館時間／9時～17時 休館日／年末年始(12/29～1/3)
入館料／大人310円、小中高生100円

出津教会堂

長崎市西出津町2602
TEL.095-823-7650(インフォメーションセンター)
※見学は事前連絡が必要です。
インフォメーションセンターのホームページよりお申込みください。
(http://kyoukaigun.jp)



ド・ロ神父像

大野教会堂

ド・ロ神父が一八九三年に建設した小規模な巡回教会。この地方の伝統的な民家建築の技術と西洋技術を融合した建物は見えたえがある。地元産の石を、赤土に石灰を混ぜた漆喰で固めた「下口壁」を、北側の玄関前へ設置して風よけにしている。



一五六六年 五島にキリスト教が伝来。五島最初の教会が奥浦に建つ

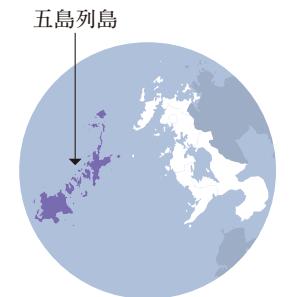
一五九七年 二十六聖人の一人、五島出身のヨハネ五島が西坂の丘で殉教

一六一四年 江戸幕府が全国に禁教令を発令

一七九七年 大村藩の農民が福江島の六方の浜に上陸する

一八六八年 久賀島の牢屋の窄事件から五島崩れが始まる

一八七三年 キリスト教の高札が撤去される



心安らぐ

祈りの島

五島列島

長崎港の西方百キロメートルに浮かび
大小百五十二の島々からなる五島列島は、
日本と大陸が交易を行っていた時代から、
重要な中継基地の役割を果たしてきた。
雄大な島に迎え入れられてきたたくさんの人々。
その中には、外海から移住してきたキリスト教の人々もいた。



ハンタマルヤ
(サンタ・マリア像)

十七世紀

堂崎天主堂キリストン資料館所蔵
寄託 五島市

明末から清初めに製作された中国・
徳化窯の白磁の像。病弱だった奈留
島のかくれキリストンが、本像を入れ手
し拝んだという。「マリア親音」と一
般的に知られる像は、潜伏期には「ハン
タマルヤ」「サンタマリア」と称され、外海
や五島列島に伝わった。浦上三番崩
の没収品（長崎奉行所旧蔵品）の中にも多數見られる。

信仰をつないだ 外海の移住者たち

“祈りの島”として知られる五島列島には、五十余りのカトリックの教会堂が存在する。島民の六人から七人に一人がカトリック信徒といわれ、豊かな自然と島内でたびたび出会う教会堂が織りなす素朴な美しさに息をのむ。

五島列島にキリスト教が伝來したのは一五六六年。フランススコ・ザビエルが鹿児島へ上陸してから、すでに十七年の月日が経っていた。なぜ宣教師たちは、この遠く離れた島にやつてきたのだろうか。キーパーソンとなつたのは、当時五島地域を治めていた宇久純定だ。西洋医療に関心があつた純定は宣教師たちと接触。やがて医師でもある宣教師ルイス・デ・アルメイダと日本人修道士ロレンソ了齋が島に招かれ、布教が広まるきっかけになつたといわれる。その後キリスト教を境に一旦途絶えたとされる五島のキリスト教徒は、外海から海を渡つ

てきた人々によって復活を遂げた。一七九七年、最初の移住者がたどり着いたのは、福江島にある六方の浜だった。そのほとんどが潜伏キリストンだったといわれ、農耕などで生計を立てながら密かに祈りを続けた。また、移住した人たちに土地が与えられたことを知ると、外海地方からの移住者は続々と増え、その数は三千人以上にのぼつたといわれている。

多様な歴史を 福江城の城跡で学ぶ

時は流れ江戸時代後期。異国の船が五島灘を往来するようになると、幕府が海岸防衛のために許可を出したことから、五島氏は念願だった福江城（石田城）を築城した。三方を海に囲まれた立派な海城は、場内に台場（砲台）が設けられたという。しかし、築城からわずか九年。明治維新に移行すると城郭解体の指令が出される。

かつての城郭内に佇む五島觀光歴史資料館は、福江港から徒歩十分の距離に位置する。お堀の向こうに見える天守閣を模した建物には、五島列島におけるキリ

五島觀光歴史 資料館

Goto
Kanko
History
Museum

異なる文化や風習が
万華鏡のように混ざり合う



五島觀光歴史
資料館

五島列島に伝わる かくれキリストianの信仰用具



裂(布)

年代不明

堂崎天主堂キリストian

資料館所蔵

寄託・五島市

外海や五島では、死者にバスクヤンの椿の木片を削つたものや、聖人等の着物の一部とされる裂(布)の糸を抜きお土産として持だせた。裂には夏物の麻素材と冬物の綿入れがあり、季節に応じて使い分けられたとい。五島では、赤く染めた麻布を「二十六聖人の御ころも」としていたといわれている。

收藏品

Collections



五島キリストian史展示コーナー



五島観光歴史資料館

五島市池田町1-4
TEL.0959-74-2300
開館時間／9時～17時
(6月～9月は18時閉館)
※いずれも最終入館は30分前まで
休館日／12月29日～1月3日
入館料／
一般300円、小中高生100円

シタン信仰の歴史に加えて、古代の暮らいや五島の遺跡、遣唐使と倭寇、五島藩にまつわる解説など、主に福江島に関する幅広い資料を展示。福江城があつた頃の町並みを再現した模型もある。当時の石垣を除いて、幻のように姿を消してしまった海城の雄姿をイメージすることができるだろう。

近年、福江島は若い人たちに人気の移住先としても注目されている。五島観光歴史資料館の館長・松嶋義治さんは、そんな福江島の特色について「小さな島の中で長い時間をかけて醸成されてきた異なる宗教や文化、風習がまるで万華鏡のように混ざり合いながら存在しています」と語る。「当館でも福江島や五島列島の特色を凝縮して紹介しています。万華鏡をのぞくように楽しんでいただきたいですね」。

アワビ貝

幕末以降
堂崎天主堂キリストン資料館所蔵
寄託・五島市
五島市浦頭のかくれキリストンの組織が所有していたもの。アワビ貝の内側の凹凸に聖人の姿を見出していたとの伝承があり、新上五島町の有福の組織でも同様の事例があるが、外海では確認されていない。

一方、天草市崎津にはアワビ貝を聖人に見立てた事例があり、五島列島と天草地の信仰上の関係性を示唆するものとして研究対象にされている。



日繰り帳

幕末以降
堂崎天主堂キリストン
資料館所蔵
寄託・五島市
外海や五島のかくれキリストンが、活動の中心においていた信仰曆。この資料は五島市平蔵町南河原のもの。外海では日本人伝道師バスチャンが、宣教師ジーンから日の繰り方を教わったという伝承から「バスチャン曆」とも呼ばれる。



誕生仏

江戸期か
堂崎天主堂キリストン資料館所蔵
寄託・五島市
新上五島町の有福に伝承、外海や五島では様々な形態の仏像等を聖人に見立てている。

藩政時代の痕跡と

郷土ゆかりの人物



白濱微氏筆
犬の絵

一八九一年

五島市指定有形文化財
福江小学校所蔵 寄託・五島市

五島藩の家老だった白濱久太夫の長男として生まれた白濱微氏は、日本における美術教育研究の基礎を築いた人物。この絵は青年時代に描き母校の福江小学校に寄贈したもの。



袴 衣桁

年代不明

五島藩ゆかりの資料 五島家
の始祖は、源平の乱を避けて
五島列島最北端の宇久島に
渡り、領主となつた宇久家盛
と伝えられている。

伊能家文書
坂部貞兵衛の手紙

一八二三年

五島市指定有形文化財
一八〇五年の第五次測量調査から伊能忠
敬に随行した坂部貞兵衛が伊能に送った
最後の手紙。五島の西海岸部の測量調査を行
っていた貞兵衛は、チフスを患い亡くなつた。
貞兵衛の死は五島藩にも大きな影響を与
えたという。五島市の宗念寺に墓がある。

堂崎天主堂 美しい海岸を望む 開かれた聖域

受け継がれる心 ⑧

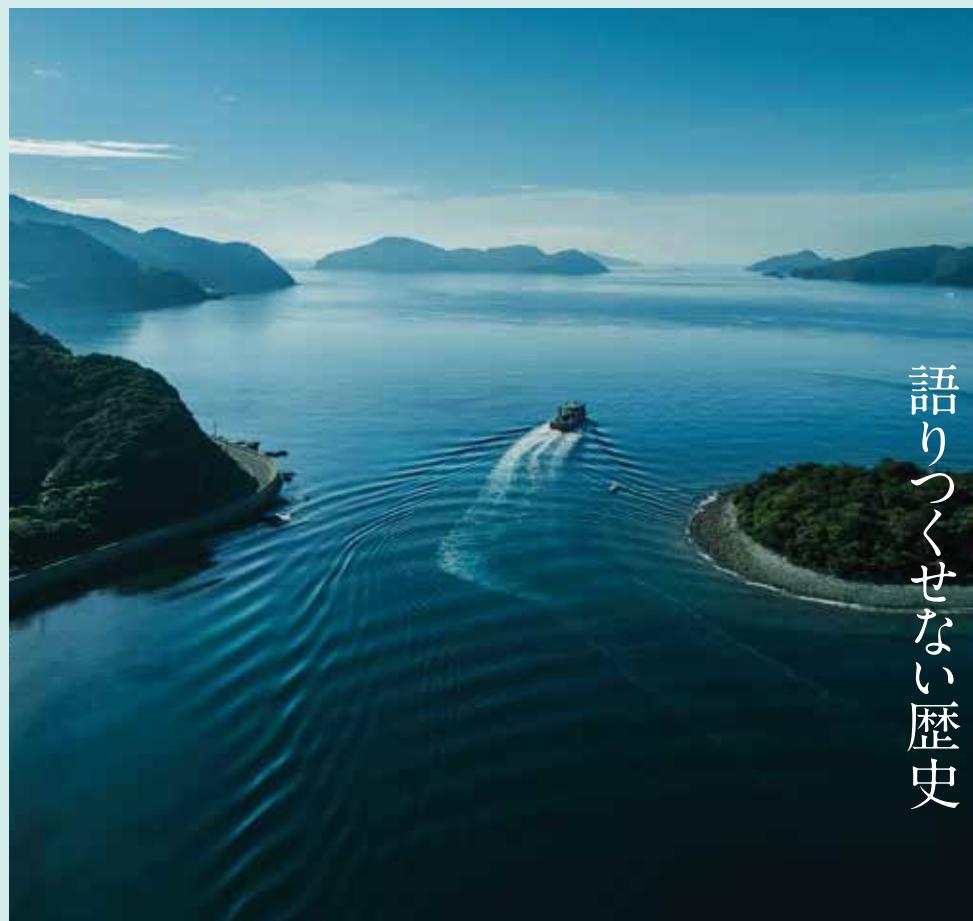
禁教の高札が撤去された四年後、五島を訪れたフランス人宣教師フレノ、マルマン両神父。堂崎天主堂のはじまりはマルマン神父が建てた小聖堂だった。その後、二代目の主任司祭となつたペルー神父が用地を拡張し、現在の赤レンガ造りの新聖堂が完成。信徒の皆さんによつて大切に守り継がれてきた祈りの場は、キリストン資料館としても公開されており訪れる人々を広く迎え入れている。

館内には二十六聖人殉教者の一人、聖ヨハネ五島の聖骨を展示。西坂の丘からマニラに運ばれ、その後マカオに分骨されていたものを、ブティイジャン神父が大浦天主堂にもたらしたという。五島の地に聖骨が帰ってきたのは、この資料館が開かれたとき。長い旅を終えてふるさとにたどり着いた。

堂崎天主堂キリストン資料館

五島市奥浦町2019 TEL.0959-73-0705
開館時間／9時～17時(11月11日～3月20日は16時閉館、
夏休みは18時閉館※8月13日～15日は17時まで)
休館日／12月30日～1月3日
拝観料／大人300円、中高生150円、小人100円





小さな島にあふれる 語りつかせない歴史

**久賀島観光
交流拠点センター**
五島市久賀町103-104
TEL.0959-77-2115
開館時間／9時～17時
休館日／
月曜日(祝日の場合は翌日)
※12/29～1/3, 7～10月は
休館日なしで開館
観覧料／無料

一つ、大開集落を訪ねた。広
大な土地を開墾するためには
多くの人手が必要だ。潜伏キ
リストンたちは、必要な労働
力としてこの地に迎えられた
ことだろう。彼らは先住島民
が開墾した水田の周辺の谷筋
を開拓し、水利を共有するな
どして生活を営んだという。
人々の生きる知恵を感じた。
島の中心である久賀地区には
旅の情報を収集できる「久
賀島観光交流拠点センター」
があり、こちらでは休憩も可
能。島唯一の武家屋敷造りの
建物は趣があり、庭園も見ど
ころの一つとなっている。



久賀島観光交流拠点センターでは、五島うどんやコーヒーが楽しめるほか、10名以上なら島の食材が満載の和食をいただくことができる(5日前要予約、1名1500円)。



明治時代中頃に建てられた「旧藤原邸」を再利用した久賀島観光交流拠点センター。



水田が広がる大開集落。潜伏キリストンたちは、この地で密かに共同体を維持した。久賀島はその美しい集落景観が高く評価され、島全域が国の重要文化的景観に選定されている。



久賀島の玄関口・田ノ浦港。

福

江島から高速船や
フェリーで約二十分。

五島列島のほぼ中央に浮かぶ
久賀島は馬蹄のような独特な
形をしており、その中心には
波穏やかな久賀湾が広がって
いる。久賀島は五島列島の中
でも三番目に大きな島であり
ながら、人口はわずか約三百
七十人と、とても静かな島だ。

島では潜伏キリストンの歴
史が語り継がれている。はじ
まりは十八世紀後半、五島藩
が積極的に久賀島を開拓移民
を受け入れていることを知つ
た潜伏キリストンの一部が島
へ渡ってきた。彼らは在来の
仏教集落の住民と漁業や農業
とともにを行いながら、二百年
以上にわたって密かに共同体
を維持し、自らの信仰を守り
続けた。

島には潜伏キリストンと在
來の仏教集落の人々が協力し
て開拓した集落がある。その

嘗みに
旅 ⑤

江 戸幕府に続く明治政府のキリストン弾圧により、一八六八年、久賀島の信徒たちが捕らえられ、残酷な責め苦を受けた。二百名の信徒たちが押し込められたのは、わずか十二畳ほどの牢屋。彼らはそこで身動きすることを許されず、排泄さえも

その場で行わなければならなかつた。この迫害は八ヶ月にもおよび、四十二名の信徒が命を落とした。

牢屋があつた場所には現在「牢屋の窄殉教記念教会」が

建てられ、信仰の碑とともに殉教者の名が刻まれた石碑が並んでいる。椿の木に囲まれた小高い丘からは久賀湾を望むことができるが、信徒たちが真冬にさらされたと聞けば、海の色が悲しみに染まっているように見える。

島には二〇一八年に「久賀島潜伏キリストン資料館」がオープンした。そこで管理人を務めている脇村富美子さんは、先祖が殉教者の一人であることを教えてくれた。「曾祖母から聞いた話では、牢屋

の番人の中には優しい人もいたそうで、空腹のため牢から

出してと何度も頼むと、『必ず戻って来いよ』と言われ、

出してくれたそうです。で

も外に出てありつけたのは、

煙の小さな芋の子。それを食

べ命をつないだそうで、曾

祖母はそのおかげでいま私た

ちは生きている、とよく話していましました」。逃げ出すと、

さらにひどい責め苦を受ける

と思つたのか、彼らは皆、再び牢屋に戻つている。久賀島

ではこれだけの迫害に遭いな

がらも、棄教した人はほとん

どいなかつたという。

教会堂の階段を下ると、赤

や白の椿の絵が描かれた石が

並べられていた。これは脇村

さんの手によるもの。「島を

訪れた記念になるようなお土

産が欲しいという声を聞き、

十年前から海で拾つてき

た石に絵を描いて、販売する

ようになつた」。最初は壯

絶な弾圧が行われた場所ゆえ

に足がすくむようないだつ

たが、脇村さんはこう言つて笑う。「私にとつてここは先

祖が眠る場所ですから怖くは

ありません。信仰の原点であ

り、特別な場所です」。石の

上に咲く椿の花に、光を見た。



ここは先祖たちが眠る
信仰の原点

牢屋の窄殉教記念聖堂にて。

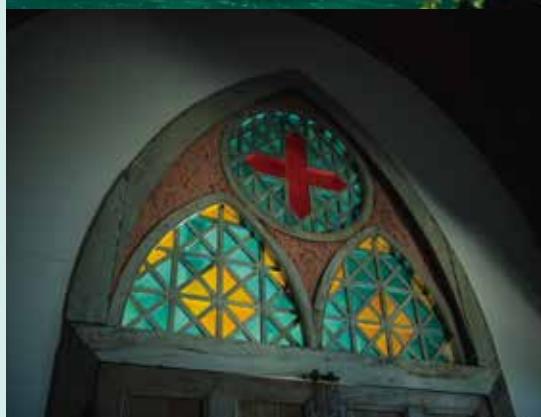
久賀島潜伏 キリストン資料館

五島市久賀町412-2
TEL.0959-77-2788
開館時間／
9時～16時30分
休館日／年末年始
入館料／300円
※入館は事前連絡を。

牢屋の窄 殉教記念聖堂

五島市久賀町大開
TEL.0959-72-3957
(福江教会)
見学時間／
9時～17時

旧五輪教会堂

嘗みに
旅出会う
⑤

入口のステンドグラスは、2枚のガラス板の間に色付きのシールを貼りつけたもの。
こうしたところに資金がなかった信徒たちの愛のある工夫が垣間見える。

浜脇教会



受け継がれた聖なる祈りの場

さに陸の孤島といった感じだが、当時の人々の移動手段が船であったことを考えると、そう不便な所でもないのかもしない。旧五輪教会堂は外から見ると民家を思わせるような素朴な佇まいだが、一歩中へ入ると、全く異なる雰囲気が漂る。島の船大工たちが造ったといわれる三廊式板張りのリブ・ボルト天井やゴシック風の祭壇は教会建築の様式が見られ、厳かな空間が広がっている。

旧五輪教会堂が建てられたのは、牢屋の窓をはじめキリストian彈圧時の殉教者の御靈を鎮めるためであったという。

以前、教会守を務めていたという脇村さんは、訪れた人に

は必ずこう説明したと話す。

「この地で迫害を受けた亡くなつた方々へのお祈りが染み込んだ教会です」。久賀島の人たちの暮らしは、今も祈りとともににある。

田ノ浦のそばの丘に建つのは、五島初の鉄筋コンクリート造りの教会堂・浜脇教会だ。真っ白な教

会堂は海からも見ることができ、周囲の山々とエメラルドグリーンの海とのコントラストが美しい。

禁教の高札が撤廃されると、一八八一年、久賀島の信徒たちはこの地に木造の教会堂を

建てる。現在の教会堂はその最初の教会堂の老朽化に伴い、一九三一年に建て替えられた

しかし老朽化した初代の木造の教会堂は取り壊されたわけではなかつた。建て替える際、「ぜひ、教会堂のない私たちの地区へ譲つてほしい」と手を挙げた人々がいたのだ。

それが島の東岸にある五輪地

切にされた。現在は新しい教会堂の隣で旧五輪教会堂として、国的重要文化財に指定さ

れている。

旧五輪教会堂へは車を降りて、十分ほど山道を下る。ま

たちの地区へ譲つてほしい」と手を挙げた人々がいたのだ。

それが島の東岸にある五輪地

以前、教会守を務めていたという脇村さんは、訪れた人に

旧五輪教会堂

五島市蘇町993-11
TEL.095-823-7650
(インフォメーションセンター)
見学時間／火曜～日曜8時30分～12時、
13時～16時30分教会守駐在。
※月曜日と火曜日(隔週)は自由見学。
※見学は事前連絡が必要です。
インフォメーションセンターの
ホームページよりお申込みください。
(http://kyoukaigun.jp)

浜脇教会
五島市田ノ浦町263
TEL.0959-72-3957
(福江教会)
見学時間／9時～17時

五島自慢の魚は 小さくても 味は絶品なり

きびなごは、きれいな水の中でしか生きられないため、少しでも水から出ると死んでしまうという、鮮度が命の小さな魚だ。五島では昔から盛んに漁が行われ、島の信徒たちは、きびなご漁で得た収入を教会堂の建設費用に充てたという。

きびなごの刺身「菊盛り」は、銀白色の帯がキラキラと光り、まるで芸術

品のように美しい。水揚げされたばかりのきびなごは身が締まっているため、骨から外れにくく、強い弾力がある。ゆえに菊盛りにするには手間がかかるが、味は格別。地元の漁師たちは仕事終わりに、きびなごの刺身で一杯やるのが最高の朝ごはんだと頬を緩める。旬は脂がのる秋から冬にかけて。五島に来たならぜひとも味わいたい逸品である。





構成資産

野崎島の集落跡

旧野首教会

外海から各地へ広がった潜伏キリシタンの一部は、神道の聖地であった島に開拓移住することによつて、神社の氏子として信仰をカモフーリッシュしながら祈りをつないだ。旧野首教会は、集落に住む十七世帯の信者たちが、きびなご派などで蓄えた資金で建てた本格的なレガ造りの教会。現在は教会としての役目を終えて、一小値賀諸島の文化的景観として、国的重要文化的景観に選定されている。

構成資産
頭ヶ島の集落

頭ヶ島天主堂

外海から移住した潜伏キリシタンの中には、病人の療養地として人が近づかなかた頭ヶ島を移住先に選んだ人々がいた。解禁後はカトリックに復帰。禁教期における指導者の屋敷の近くに建てたのがこの天主堂だつた。石材を使用することで建築費を抑ええた信徒たち。自らの力で石を運び積み上げ、およそ十年の年月をかけて造り上げた。



江上天主堂

構成資産

奈留島の江上集落
(江上天主堂とその周辺)

外海からこの地に潜伏キリシタンが移住してきた頃は教会がなく、信徒の家でミサが行われていたという。本格的な教会が建築着工されたのは九七年、設計施工を担当したのは教会建築の名工といわれる鉄川与助だ。周辺に海や川があり湿度が高いことから、通気をよくするために床を高くした。



海外交流の

歴史と

キリスト教史

※主な出来事を掲載しています。

一五五〇年 平戸にポルトガル船が来航。ザビエル、平戸にて布教

一五六三年 大村純忠が受洗（日本初のキリストン大名）

一五六六年 五島にキリスト教が伝来。五島最初の教会が奥浦に建つ

一五七一年 外海にキリスト教が布教される

一五七九年 巡察師ヴァリニヤーノが口之津に来航

一五八〇年 大村純忠が長崎と茂木をイエズス会に寄進。有馬晴信が受洗。有馬にセミナリヨが建つ

一五八一年 天正遣欧使節が長崎を出発

一五八七年 豊臣秀吉が伴天連追放令を發布

一五八二年 二十六聖人が西坂の丘で殉教

一五八七年 二十六聖人が西坂の丘で殉教

一五九九年 平戸でキリストンが禁教になる

一六〇三年 德川家康、江戸幕府を開く

一六〇九年 平戸にオランダ商館を設置

一六一四年 江戸幕府が全国に禁教令を発令

一六三七年 島原・天草一揆が始まる。総大将は天草四郎

一六四一年 平戸から長崎出島へオランダ商館が移転

一六四四年 国内最後の神父が殉教し、国内に不在となる。
以降、残された民衆は自分たち自身で信仰を続けることになる

一七九六年 大村藩と五島藩の間に農民移住の協定が成立

一八六五年 信徒発見、潜伏キリストンが
大浦天主堂でブティジヤン神父に信仰を告白する

一八六七年 浦上四番崩れが起ころ

一八六八年 久賀島の牢屋の窄事件から五島崩れが始まる。
明治政府発足（明治元年）

一八七三年 キリストン禁制の高札が撤去される

一八八一年 ド・ロ神父が出津教会堂を建設

※浦上四番崩れ、五島崩れ：江戸末期から明治初期にかけて起きた、
潜伏キリストンに対する大規模な摘発事件。

1550～
1882
Chronology

参考文献・参考サイト

- 図録「信徒発見150周年記念事業 世界遺産推薦記念特別展 聖母が見守った奇跡～長崎の教会群とキリスト教関連遺産～」特別展「聖母が見守った奇跡」展実行委員会
 - 図録「ローマを夢みた美少年 天正遣欧使節と天草四郎展」長崎歴史文化博物館編集・発行
 - 図録「バチカンの名宝とキリスト文化～ローマ・長崎 信仰の証～」長崎歴史文化博物館編集・発行
 - 図録「鄭成功生誕400周年記念事業 鄭成功とアジアの海」松浦史料博物館・平戸オランダ商館制作
 - 「かくれキリシタンとは何か～オラショを巡る旅」中園成生著(弦書房)
 - 「南島原原歴史遺産 原城跡、日野江城跡、吉利支丹墓碑を中心にキリスト教史跡をたずねて」南島原市企画・発行
 - 「世界遺産 キリスト教の里～長崎・天草の信仰史をたずねる」本馬貞夫著(九州大学出版会)
 - 「ザビエルからはじまった日本の教会の歴史」結城了悟著(女子パウロ会)
 - 「長崎歴史100人事典」長崎文献社著・発行
 - 「天草四郎と島原の乱」鶴田倉造著(熊本出版文化会館)
 - 「長崎奉行の歴史 苦悩する官僚エリート」木村直樹著(KADOKAWA)
 - 「五島市の教会 ポケットガイド」五島市世界遺産登録推進協議会発行
 - 「五島キリスト教伝来と信仰のあゆみ」五島市世界遺産登録推進協議会発行
 - 「久賀島キリスト教検挙事件 宅屋の窄のキリストの証し人」久賀島潜伏キリスト教資料館
 - 「旅する長崎学6 キリスト文化 別冊 総集編 キリスト文化の旅 長崎へのいざない」長崎文献社企画・発行
 - 長崎と天草地方の潜伏キリスト教関連遺産公式ホームページ
 - 黒島観光協会ホームページ
 - 林水産ホームページ
 - 新上五島町観光物産協会ホームページ
 - ながさき旅ネット
 - 長崎伝統芸能振興会ホームページ
 - 五島市観光サイト 五島の島たび
 - おぢか島旅
 - 長崎市ナガジン
 - 平戸チャンネル
 - 出島公式ホームページ
 - 九州オルレホームページ

協力

- カトリック長崎大司教区
 - 松浦史料博物館
 - 平戸市生月町博物館・島の館
 - 春日集落案内所かたりな
 - 林水産
 - 長崎歴史文化博物館
 - 大浦天主堂 キリシタン博物館
 - 長崎県美術館
 - 国指定史跡 出島と蘭商館跡
 - 有馬キリシタン遺産記念館
 - 南島原冬のお祭り実行委員会
 - 元祖 具雜煮 姫松屋
 - 南島原市地域振興部商工観光課
 - 長崎市外海歴史民俗資料館
 - 長崎市文化観光部 文化財課
 - 出津農楽舎
 - 旧出津救助院
 - 長崎市ドロ神父記念館
 - 五島觀光歴史資料館
 - 堂崎天主堂キリシタン資料館
 - 久賀島觀光交流拠点センター
 - 久賀島潜伏キリシタン資料館
(順不同)



ONE

ようこそ、長崎のミュージアムへ

ANSWER

博物館・美術館ガイドブック

2025年3月1日発行



世界文化遺産
長崎と天草地方の
潜伏キリシタン関連遺産
公式サイト

※教会堂見学は事前連絡が必要です(大浦天主堂を除く)。見学の際にはマナーを守り、厳粛な雰囲気の中で心静かにお過ごしください。

●企画・発行
長崎県文化振興・世界遺産課
(編集担当／長崎県文化観光連携
コーディネーター 花田佐奈美)
〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3-1
TEL.095-895-2768

令和6年度 文化庁
文化観光拠点施設を中心とした
地域における文化観光推進事業

●制作・販売
(株)イーズワークス
〒850-0853
長崎県長崎市浜町3-23 浜せんビル4F
TEL.095-827-8960
FAX.095-827-8961

●撮影 松村琢磨／山頭範之

●定価 1,650円（税込）

●印刷 (株)インテックス



旅する長崎学
ガイドブック
公式サイト



※本誌に掲載している内容におきましては、2025年1月
現在までの情報です。開館時間・入館料など変更に
なる場合がありますので、あらかじめご了承ください。
※本誌掲載の記事、写真、イラスト、図表等の無断複写
(コピー)、複製、転載を固く禁じます。
※万一、落丁、乱丁がございましたら、販売元にご連絡
くださるよう、お願ひいたします。